

上二句はその地の遼遠なるを形出す、玉門關外、春光度らざるの地、初め楊柳を生ず、而して羌笛聲中、一曲の楊柳、嗚咽して怨を吹く、然れども身、春光度らざるの地に在るの怨は、笛中楊柳の怨に比して、更に怨むべきものあり、何ぞ楊柳なき所に向つて偏に楊柳を折るの怨を傳ふるを須ひんや。下二語反語を以て怨の又怨なるを曲寫す、神韻縹緲として形相すべからず、阮亭(王漁洋)の唐絶歴卷として之を第一位に置くは洵に過當に非ざるを見るなり。

王之渙、開元中王昌齡・高適と忘形・爾汝の交あり、三人風塵未だ遇はずして、游處も亦ほぼ同じ、一日天寒く微雪す、相携へて共に旗亭に詣り酒を貰うて小飲す、忽ち梨園の伶官十數人あり、樓に登つて會譚す、三詩人因つて席を避けて俛映し、爐火を擁して以て觀る。俄かにして妙妓四輩あり、相續いて至る、奢華黠曳して都冶頗る極まる、少くありて則ち樂を奏す、みな當時の名部なり。昌齡等私かに相約して曰はく、我輩各、詩名あり、然れども自らその甲乙を定めず、今日宜しく諸伶が譚ふ所を觀るべし、若し我輩の詩ならんには、その歌詞の多きものを以て定めて優等とせんと。俄かにして一伶、節を拊して歌うて曰はく「寒雨連江夜入吳。平明送客楚山孤。洛陽親友如相問。一片冰心在玉壺。」(三百二十)王昌齡則ち手を引いて壁を畫して曰はく一絶句と。又一伶譚うて曰はく「開闔淚沾臆。見君前日書。夜臺何寂寞。猶是子雲居。」(哭單父梁九少府)高適則ち手を引いて壁を畫して曰はく一絶句と。又一伶譚うて曰はく、「奉帚平明金殿開。且將團扇暫徘徊。玉顏不及寒鴉色。猶帶昭陽日影來。」(三百十九)王昌齡又手を引いて壁を畫して曰はく、二絶句と。王之渙自ら名を得る已に久しきを以て、傲然として二人に謂つて曰はく、この輩は潦倒の樂官、

唱ふる所みな下里巴人の調のみ、豈に陽春白雪の曲、俗物敢へて之に近づかんや。因つて諸妓中の雙鬟最も佳なる者を指して曰はく、この子の唱ふる所を待て、如し、我が詩に非ずんば即ち終身敢へて子等と銜を争はじ、もし是れ我が詩ならば、子等當に須く牀下に列拜し、吾を奉じて師となすべしと、因つて歡笑して之を俟つ、須臾にして唱曲の次、彼の雙鬟に至る、發聲輒ち曰はく「黃河遠上白雲間。一片孤城萬仞山。羌笛何須怨楊柳。春光不度玉門關。」之渙大いに喜び即ち二子を擲擲して曰はく、田舍奴、我れ豈に妄ならんや。因つて大いに諸笑す、諸伶競うて拜して曰はく、俗人肉眼、神仙の下降を識らずと、俱に俯して筵席に就く、等爲にその事を話す、諸伶競うて拜して曰はく、俗人肉眼、神仙の下降を識らずと、俱に俯して筵席に就く、三人之に従うて飲み、酣醉すること竟日。是れ薛用弱が集異記に載する所の旗亭畫壁の始末、風流の佳話として今に艶稱せらるゝものなり。顧ふに之渙の詩、千古に冠絶す、固より雙鬟の賭唱を待たず、而して詩人の名を好み勝を争ふ、古來みな然り、清の乾隆中、袁子才(枚)・趙雲松(翼)・蔣心餘(銳士)名を齊しうし、乾隆三家と稱す、蔣早く卒す、桐郷の程拱宇なるものあり、自ら謂ふ三家の詩に非ざれば讀まずと、則ち拜袁・揖趙・哭蔣の三圖を作る、趙甌北(翼)拜揖の間、語に分寸あるを喜ばず、長歌を賦して嘲を解いて云はく、

唐初詩人各標置。
不是女郎是佳士。

品題乃定旗亭妓。
蓮花如面好風姿。

千年佳話復見今。
香草題詩豈才思。

拜袁揖趙哭蔣君。
敬則武夫出不意。

手繪成圖供清閱。
老韓合傳縱被嘲。

衛軍同日進三公。
亮瑜並世豈須忌。

得君一揖已足幸。

敢望五體俱投地。

我觀李杜兩大家。

吹臺同游早結契。青蓮落落賦飯顆。少陵倦倦慮魑魅。
 當時聲望李獨高。後世才名杜寧次。貴不可卿。乃卿。
 人心何容設軒輊。獨羨隨園文字交。福比香山白居易。
 居易名先元九齊。晚更劉郎鴈詠繼。逢稱元白及劉白。
 陽五伴侶隨時異。翁昔買隣有心餘。近復把我入林臂。
 前呼袁蔣後袁趙。恰與醉吟同故事。舊游已記三徑開。
 新知兼數一樓倚。天生詞垣兩後輩。似爲此翁助聲氣。
 程生作繪定可人。雅尙所存非漫戲。繡絲已肖平原像。
 聞笛兼下山陽淚。三分鼎豈吾所堪。一瓣香知渠有寄。
 坐有揖客自增重。我亦本非折腰吏。
 (風北詩鈔 七言古詩)

その廣長舌眞に人を驚倒せしむ、我嘗て極めて此を愛誦す、その起語の仍ほ旗亭畫壁に本づけるを以て、牽連して此に録し、未だ此を讀まざるの士と同賞せんとす。

九日送別

薊庭蕭瑟故人稀。何處登高且送歸。
 今日暫同芳菊酒。明朝應作斷蓬飛。

明日天涯、且つ以て今日を永うす、用意周匝にして語も亦能く到る、故人甚だ稀なるの地偏に故人と敘別す、その情何ぞ悽慘ならざるを得ん、斷蓬以て芳菊に對す、未だ甚だ作意なるを免れずと雖も、その彼我俱に羈旅なるの意に於ては頗る能く狀し得て出たり。

洛陽客舍逢祖詠留宴

蔡希寂

綿綿漏鼓洛陽城。客舍平居絕送迎。
 逢君買酒因成醉。醉後焉知世上情。

前半は洛陽の客舍、後半は祖詠に逢うて留宴す、客舍はその無聊を極め、留宴はその款洽を盡す、平居送迎を絶して、而して祖に逢ふ、獨り此の如し、この中自ら祖の人品の高を寫す、故に結句に「焉知世上情」と云ふなり、詩極めて平易近人、拈して以て兒童に作詩の法を教ふべし、蔡は曲阿の人、官は渭南の尉に至る、當時洛陽に客たり、祖詠は即ち洛陽の人。

少年行
 承恩借獵小平津。使氣常游中貴人。

吳象之

一擲千金 渾是膽

家徒四壁 不知貧

借獵の字、的解なし、唐仲言謂ふ、地は少年馳獵の場に非ず、只天子の命なるを以て此に借獵すと、この義、或は當に然かるべし。その交游する所則ち内廷貴幸のもの、故に時に復たその勢を借り、禁地に獵して顧みず、特に此のみならず、千金を一擲して毫も惜しむ所なく、家徒らに壁立して、反つて自らその貧を知らず、使氣任俠の性に屬すと雖も、渾身是れ膽に非ずして能く此の如き歟。下二句寫し得て豪快と雖も、その實亦是れ中貴の勢を恃むのみ、詩必ず指斥する所あり因つて以て諷規を寓するならん。吳象之は南陽の人、天寶中の進士、至徳中、杜甫等の鷹を以て左補闕に補す、則ち殆ど岑嘉州とその遭際を同じくせるもの、惜しむらくは詩已に寥寥、傳も亦甚だ詳かならず。

江南行

張潮

芙蓉葉爛別西灣

蓮子花開猶未還

妾夢不離江上水

人傳郎在鳳凰山

芙蓉は水田中に生ず、五月間白く花さき、冬に至つて葉死して根食すべし、多く江南に産すと云ふ。芙蓉葉爛の候、郎と西灣に別る、明らかに是れ秋冬の交、蓮子花開くに至つて還らず、春夏を歷て終に消息なき

なり。郎と別る、江上に於てす、是を以て妾が夢日夜に江水を離れず、而して忽ち郎今鳳凰山に在りと傳ふるものあり、何ぞ行踪の定なきこと此の如くなるや。沈歸愚曰はく、二句は水に在り山に在りて、俱に實指し難きを謂ふと、この解最も妙、而して山、鳳凰を以て名づく、別に新歡(新に出來)の俱に于飛の樂を效するものあるが如し、地名に因つて情を生じ、思婦の胸臆を傳出す、妙に古樂府の神理を得たり、潮は潤州の人、處士を以て終る、その詩股播が撰する所の丹陽集に見えたり、餘は多く傳はらず。

軍城早秋

嚴武

昨夜秋風入漢關

朔雲邊月滿西山

更催飛將追驕虜

莫遣沙場匹馬還

本篇の事、已に杜詩の下に註す、氣體英爽にして殆ど杜と拮抗、三四意必穢を期す、大いに大將の氣概を見る。武、字は季膺、華州の人、その後劍南を鎮するに當つて頗る專恣無君の跡あり、後來節鎮擅制の禍多く此に源して、而して唐室終に削弱す、故にその人物を論ずれば、固より功罪相償ふに足らず、然れども心を風雅に留め、杜甫を優禮して終始一の如きは、殊に亦得難しとす。或は言ふ武、性暴猛、漸く子美の傲誕を厭ひ、外は忤を爲さざるが如きも、中、實に之を銜む、一日子美及び梓州の刺史章彝を殺さんと欲し、吏を門に集む。武、將に出でんとして、その冠偶、簾に鈎するもの三、左右その母に白し、奔救して止むこ

とを得、獨り葬を殺せりと、この説范攄が雲溪友議に出て、新唐書據つて以て傳に書す、然れども友議の説は多く之を委巷に得たり、信ずべからざるもの多し、因つて此に附書し聊か異聞に備ふ。

重送裴郎中貶吉州

劉長卿

猿啼客散暮江頭。

人自傷心水自流。

同作逐臣君更遠。

青山萬里一孤舟。

劉文房肅宗の至德中、監察御史たり、尋いで檢校祠部員外郎を以て、出でて轉運使の判官と爲る。偶、吳仲孺なるもの、誣奏に遭ひ、姑蘇の獄に繋がれ、久しうして播州南巴の尉に貶せらる、その友之がために辨ずるものあり、陸州の司馬に量移し、隨州の長史にをはる、その清才冠世なるを以て類る浮俗を凌ぎ、未だ傲睨にして時に忤るを免れず、故に高仲武は謂ふ、その吏幹ありて上を犯し、兩度の遷謫みな自ら取ると。唐詩紀事(卷二)に云ふ、長卿詩を以て名聲を上元・寶應の間に馳す、皇甫湜言へるあり、未だ劉長卿の一句あらざるに、已に宋玉を呼んで老兵と爲し、未だ賈賓王の一字あらざるに、已に宋玉を罵りて罪人と爲す、その名重き此の如しと。裴郎中は想ふに文房が播州に貶せらるゝと同時吉州に右遷せられしもの、故に「同作逐臣」の語あり、南巴は京師を去る稍、吉州より近し、故に「君更遠」と云ふあり、「猿啼客散」は正に是れ重送の時の光景、人自ら傷み水自ら流る、是れ涙を青山萬里一孤舟に瀝ぐ所以、情殊に悽婉たり。宋宗元

云ふ、同病相憐む、情詞愷切なりと。

送李判官之潤州行營

萬里辭家事鼓鼙。金陵驛路楚雲西。
江春不肯留行客。草色青青送馬蹄。

起句は是れその行營に之くを送る、次句送別の地、一江の春色本と宜しく客を留むべくして、而して草色の青青たる適、亦君の馬蹄を送るものに似たり、故に「不肯」と云ふ、文・情、曲にして致あり、唐仲言云ふ、行客の留まらざるを言はずして、江春肯へて留めずと言ふ、正に絶句中翻弄の法なり。僧大典云ふ、客自ら留まらずして、恨を春草に歸す、風人の情あり。

隨州の詩は研鍊深穩にして自ら高秀の韻あり、洵に中唐に冠冕たるに足る、その絶句未だ本選に登らざるもの「事去人亡跡自留。黃花綠帶不勝愁。誰能更向青門外。秋草茫茫春欲遍。行人一騎發金陵。蕭條獨向汝南行。客路多逢漢騎營。古木蒼蒼離亂後。幾家同住一孤城。新息寂寂孤鷺啼。杏園寥寥一犬吠。桃源落花芳草無尋處。萬壑千峰獨閉門。」過歸山皆妙。

春行寄興

李華

宜陽城下草萋萋。芳樹無人花自落。

澗水東流復向西。春山一路鳥空啼。

李華は蕭穎士の密友、字は遐叔、趙州の人、天寶中監察御史に遷る、祿山の亂、賊中に失陷し、僞署を受くるに至る、是を以て常に自ら危亂を踐んで節を完うする能はざるを傷み、肅宗の上元中左補闕を以て召さるゝも肯へて就かず、代宗大曆の初に卒す。その人大節已に虧く、與に言ふに足るなし、然れども蕭・李の文章、一時に冠絶す、その文詞綿麗にして精采煥發せるは、實に古の作者に追配すべし、蕭穎士嘗てその含元殿の賦を見て、以て景福の上靈光の下に在りとす、未だ失當と謂ふを得ざるものあり。この詩想ふに亦祿山亂後感傷する所あつて作るもの、草長じ水逝き、花落ち鳥啼く、春山芳樹、一路人なし、その愴神の處、殊に一「自」字一「空」字に在り、その危亂に遭逢し、賊庭に汚辱せるもの亦乃ち一「自」字の誤る所にして、悔志ありと雖も、亦只、之を一「空」字に歸せざるを得ざる母き乎、華が權阜の銘に云はく、「瀆而不薄。瑜而不瑕。元德秀の銘に云はく、「貞玉白華。不緇不磷。四皓の銘に云はく、「道不可屈。南山採芝。竦慕元風。徘徊古祠。」その文章に託して以て意を見る此の如し、則ちこの詩亦斷として苟作せるものに非ざるなり。按ずるに唐の文章、太宗の貞觀より以後、多く六朝

駢儷の體を沿襲す、開元・天寶に至りて、詩格は大いに變じたるも、文格は猶ほ舊規を襲へり、元次山起つて獨孤及と共に憂々自異し、大いに排偶綺麗の習を消除し、蕭穎士・李華と、亦之を左右相羽翼す、その後韓・柳繼起し、唐の古文遂に蔚然として極めて盛んなり、彫を對して樸と爲すは數子實に首功に居る、此れ詩道に關なしと雖も、文學の遞變を究めんと欲するものは、必ず精研せざるべからず、因つて此に一言す。

歸雁

錢起

瀟湘何事等閒回。水碧沙明兩岸苔。

不勝清怨却飛來。

錢仲文「數峰江上」の句千古に豔誦し、この詩亦復た湘靈の瑟を用ふ、「不勝清怨」の四字乃ち是れ一篇立意の有る所、此を以て歸雁の歸に關合す、文情雙絶と稱すべし、瀟湘の傍、水碧に沙明らかなり、雁この地に來る、亦悽託するに足る、而して乃ち歸り去るものは何ぞや、蓋し湘靈が鼓する所の二十五絃、清怨の音、以て明月に彈ず、雁必ず聞くに勝へざるものあり、是を以て肯へて止まらずして、却つて回飛するのみ。飛來の來は助語辭に屬す、猶ほ歸去來の來に同じ。沈歸愚謂ふ、この詩呼起の語を作して、三四相應ず、琴中に歸雁操あり、故に操中より着想すと、史記の封禪書に云はく、昔、秦帝、素女をして五十絃の瑟を鼓せしむ、その聲悲しうして殆ど聞くに禁へず、因つて破つて二十五絃と爲さしむと、本篇暗にその事を用ひた

り。唐汝詢が解、仲文蓋し意を歸雁に託して以て、自ら彼の「曲終不見」の一篇の鬼神を泣かし飛鳥を感ぜしむるに足れるを誇るなりと謂ふに至つては、風味索然、所謂之を視るの淺きものなり。

登樓寄王卿

韋應物

踏閣攀林恨不同。
數家砧杵秋山下。

楚雲滄海思無窮。
一郡荆榛寒雨中。

山下の砧杵、雨中の荆榛、此れみな踏閣攀林の見所、獨り自ら眺望して故人と同遊せざるを恨む、是を以て楚雲滄海に寄聲して吾が情思の無窮なるを表せんとするなり。景を觀て人を懷ふ、耳目の接する所自ら離緒に動關す、その荆榛と曰ふは想ふに是れ戦後の作、兵亂荒廢の狀都べて箇中に傳出す。

吳梅村の句「三江風月餘前醉。一郡荆榛笛裏聲。」(吳梅村詩集卷十五、十月下滄借九日)蓋し韋がこの語を用ふ此れ亦明季兵亂の後雲間に公譏するの作なり、趙甌北その雜湊して句を成し、掉運露ならず、斡旋轉ぜざるを譏る(蘇北詩)。顧ふに趙が詩は専ら宋人を宗とす、その唐調別にこの種の筆墨ありて一唱三嘆の致を字面の中に寓したるは、趙輩が未だ知り易からざる所、その言亦何ぞ盡く信據すべけん耶。

酬柳郎中春日歸揚州南郭見別之作

廣陵三月花正開。

花裏逢君醉一廻。

南北相過殊不遠。

暮潮歸去早潮來。

應物時に蘇州の刺史たり、その揚州と正に江を隔て、相望む、柳郎中は蓋し揚州に官するもの、廣陵は即ち揚州なり、一二の語を玩するに、柳偶、蘇州に來り、歸るに臨んで韋に花時來遊の約を訂す、故に直ちにその語を記して以て詩に入れたるものなり。大江南北、一水盈盈、且暮潮に隨うて相往來すべし、故に廣陵城裏花信風動くの時、必ず夙諾を踐んで以て君を訪ひ、醉樂すること一廻すべしとなり。淡淡寫し起し、興復た淺からず、その自然の處殊に吟詠に耐へたり。

劉太真、韋蘇州に與ふるの書あり、云はく、足下郡齋議集の諸作是れ何ぞ情致暢茂趣逸なる此の如きや、宋・齊間沈(約)・謝(暉)・吳(均)・何(遜)、始めて意理に精しく、緣情體物、詩人の旨を得たり、後の傳ふるものは少し、惟、足下その横流を制す、師攀の始、關雎の亂、足下の文に於てこれを見る云云、是れ韋が詩の當時に重んぜられしを見るに足る、以て曾季狸が所謂前人詩を論じて韋蘇州あるを知らず、東坡に至つて始めてこの秘を發すと云ふの妄説たるを破るべく、従つて元微之が白樂天に與ふるの書に、蘇州の在時、人も亦甚だ愛重せず、身後に於て則ち之を愛すと云へる、亦未だ確ならざるべきなり。韋、後に累官して太僕少卿と爲り御史中丞を兼ね、諸道の鹽鐵轉運、江淮の留後に陞る、時人蘇州を以て之を稱するを以てその官此に留ると云ふは非なり、年九十餘にしてその終る所を知らず、新舊唐書並に傳なし。その絶句

獨憐幽草澗邊生。上。有。黃。鸝。深。樹。鳴。春。潮。帶。雨。晚。來。急。

野渡無人舟自橫。

尤も人口に膾炙せる所にして本選之を佚す、故に附録す。

送魏十六還蘇州

皇甫冉

秋夜沈沈此送君。
歸舟明日昆陵道。

陰蟲切切不堪聞。
回首姑蘇是白雲。

高仲武、その中興閒氣集に於て、皇甫冉を擊賞し、云ふ、その桂を禮闈に擯んでてより、遂に高格と爲る、往に世道の艱虞なるを以て、江外に避地せるも、文章一たび朝廷に至る毎に作者色を變ずと、此を以て張九齡及び獨孤及が言と相參すれば冉たるもの以て窺ひ見るべし(二百三十)。この詩別愁凄切、三四尤も渺渺愁予の懷に堪へず、詩意は自ら明亮なり。

曾山送別

淒淒游子苦飄蓬。
南望千山如黛色。

明月清樽祇暫同。
愁君客路在其中。

千山黛の如し、是れ君の行路、前の昆陵回首姑蘇白雲と同一の意況にして、凄然として襟を沾す、亦相譲らず、暫同の歡を以て、久別の苦を形す、飄蓬と云ふものは定準なきを謂ふなり。

冉が巫山高の樂府

巫峽見巴東。迢迢半出空。
朝暮泉聲落。寒暄樹色同。

高仲武謂ふ、この詩終篇みな麗、晉・宋・齊・梁・周・隋より以來採掇するもの無數にして、補闕獨り麗珠を得たり、前賢をして失歩し後輩をして却立せしむ、天假に非ざるよりは、何を以てか斯に追はん、恨むらくは長轡未だ聘せずして芳蘭早く凋む、悲しい夫と。その推稱せらるゝ此の如し。

寒食

韓翃

春城無處不飛花。
日暮漢宮傳蠟燭。

寒食東風御柳斜。
青煙散入五侯家。

德宗の時、知制誥の官に闕員あり、帝、詔を以て之に補せんと欲す、時に姓名を同じうするものあり、因つて御筆「春城無處不飛花」の二十八字を書し、その下に批して云はく、この韓翃に與へよと。宋の時、張子野初めて宋子京を訪ひ、自ら稱す、來つて「紅杏梢頭春意闌」の尙書を見んと、宋喜んで之を迎へ、「雲破

月來花弄影」の郎中に非ざるを得んやと曰へり、これ「春城無處不飛花」の韓翃と頗る相類し、並に傳へて佳話と爲す。翃がこの詩已に上主の知を辱うす、その才華の秀麗なる實に及び易からざるものあり、寒食禁煙の候、春城花飛んで御苑の楊柳亦已に風を受けて斜なり、是れ寒食の景を寫す、下二句因つて而して寒食の事に及ぶなり。千門萬戸この日みな煙火を絶す、然れども宮中に在つては獨り燃燭を許す、而して唐例又、清明の日、榆柳の火を取りて近臣に賜ひ以て優寵を見る、故に日暮れて宮中一たび蠟燭を點ずれば、青煙搖曳して取次に五侯七貴の家に滿つ、是れ士民に在つては望むべからざるの事、是を以て特に之を紀するなり。讀者此によりて以て唐、蕭・代之二帝より以下、寵貴の臣漸く多きを徴するは可なり、若し翃が詩即ち此を諷刺するものなりと謂はゞ固より詩の本意に非ず、又、漢宮は指斥を避くるがために借用す、或は漢時には蠟燭なるもの無きを以てこの詩の疵瑕なりとせるものあり、吹毛の索輕重を爲すに足らず。翃は少くして才名を負ひ、天寶の末已に進士に擧げらる、大歷十子中に在つて尤も雋麗なるもの、所謂興致繁富にして芙蓉の水を出るが如しとは、本篇の如きそれ庶幾からん乎。一時の標榜、劉隨州・皇甫冉が上に在りとす、未だ過當と謂ふことを得ず。

送客知鄂州

江口千家帶楚雲。
江花亂點雪紛紛。
春風落日誰相見。
青翰舟中有鄂君。

客の鄂州に知たるを送る、故に先づ楚雲を以て之を映帶す、蓋し鄂は古の楚の屬國たればなり、落日春風花亂れて雪の如し、此れは是れ別時の景、結句鄂君の事を用ふ、客を以て之に比するなり。說苑に云はく、楚王母弟鄂君子皙、舟を新波の中に泛ぶ、青翰に乗じ翠蓋を張り、鐘鼓の音を會す、榜櫂の越人楫を揮して歌うて曰はく「今夕何夕兮，搴洲中流。今日何日兮，得與王子同舟。」是に於て鄂君乃ち脩袂を揜げ、行いて而して之を擁し、繡被を擧げて之を覆ふと(說善)この事後來龍陽君の典と齊しく之を男色の義に用ふ。今翃乃ち以て鄂に知たるものに比す、豈にその容貌の華麗なるが爲に相戯るか、抑、別に指す所ある歟。

宿石邑山中

浮雲不共此山齊。
山靄蒼蒼望轉迷。
曉月暫飛千樹裏。
秋河隔在數峰西。

浮雲山と齊しからざるは、山の高き更に浮雲の上に在るなり、已に雲表に聳出す、その上に登つて望む、則ち山氣蒼々として望眼爲に迷ふ、三四は高處宿夜の奇景、正に是れ眼内迷離の象、月光樹枝の罅中より出でて忽ち見え忽ち隠る、故に「暫飛」と云ふ、「隔在」は咫尺殆ど逼近すべきを疑ふなり。

韓翃、字は君平、南陽の人、その未だ志を得ざる時、孤貞靜默自ら守るも、興に遊ぶ所はみな當時の名

士、幕門主賓、室は唯、四壁のみ。隣に李將の妓柳氏なるものあり、李至る毎に必ず韓を邀へて同飲す、韓は李が窟達の大丈夫なるを以て常に逆らはず、既に久しうして愈、狎る。柳毎に暇日を以て壁を隙し、韓が居る所を窺ふに即ち蕭然たり、良、久しうして客の至るを聞けばみな名人なり、因つて間に乘じて李に語つて曰はく、韓秀才窮甚し、然れども與に遊ぶ所は必ず聞名の人なり、是れ必ず久しく貧賤なるものに非ず、宜しく之を假借すべしと、李深く之を領す、一日を間して饌を具へて韓を邀へ、酒酣にして韓に謂つて曰はく、秀才は當今の名士なり、柳氏は當今の名色なり、名色を以て名士に配す亦可ならずやと、遂に柳に命じて坐に出て韓に接せしむ。韓殊に不意に出て、敢へて當らざるを懇辭す、李曰はく、大丈夫相遇ふ、杯酒の間一言道合はゞ尙ほ相許すに死を以てす、況や一婦人をや、何ぞ辭するに足らんと。率に之を授け、又韓に謂つて曰はく、夫子居貧にして以て自ら振ふことなし、柳が資數百萬、以て濟を取るべし、柳は淑人なり、宜しく夫子に事へて能くその操を盡すべしと、即ち長揖して去る。

韓既に柳氏に就いて居り、その資助に依つて一舉に名を成すことを得たり、後、數年淄青の節度使侯希逸、夙に韓の才を愛重し、表奏して韓を辟してその幕の從事たらしむ、この時國亂方に擾するを以て、敢へて柳を以て自ら隨へず、期して之を迎へんことを約し、留めて都下に置く、烏兔倏忽、三年を経て未だ迎接を果さず、因つて良金を以て練を買ひ、詩を題して之に寄せて曰はく、

章臺柳。章臺柳。
 亦應攀折他人手。
 往。日。青。青。今。在。否。
 縱使長條似舊垂。

柳復書して答へて云はく、

楊柳枝。芳菲節。
 可恨年年贈離別。
 一葉隨風忽報秋。

縱使君來豈堪折。

柳は色を以て顯はる、獨居の自ら免れざることを恐れ、乃ち落髮して尼と爲り、佛寺に居らんと欲す。その後韓、希逸に隨つて入朝し、柳が居を尋訪して得ず、蓋しこの時已に立功の蕃將沙吒利が爲に劫奪し去られ、之を寵して專房す。翺、悵然として割する能はず、會、中書に入り、子城の東南角に至るに、轎車に逢ふ、緩歩して之に隨ふ、車中より問うて曰はく、青州の韓員外に非ざるを得んや、曰はく是なり、遂に簾を披いて曰はく、妾は柳氏なり、身を沙吒利に失して自ら脱するに由なし、明日尙ほこの路より還らん、願はくは更に一たび來りて別を取れと。韓深く之を感じ、明日期の如くにして往く、轎車尋いで至り、車中より一紅巾を投じ、小盒子を苞んで實するに香膏を以てす。嗚咽して言つて曰はく、終身永訣すと、語畢つて車、電の如く逝く、韓情に堪へず、之が爲に雪涕す。

この日臨淄の大校、酒を都市の酒樓に致し、韓を邀ふ、韓、之に赴き悵然として樂しまず、座人曰はく、韓員外風流談笑未だ嘗て適せずんばあらず、今日何ぞ慘然たる耶、韓、具に之を語す、虛侯將許俊なるものあり、年少にして酒を被る、起つて曰はく、僕嘗て義烈を以て自ら許す、願はくは員外の手筆數字を得ん、當に立るに之を置くべしと、座人みな激賞す、韓已むを得ずして之を與ふ、俊乃ち急裝し一馬に乘じ、一馬を牽いて馳せ、徑ちに沙吒利が第に趨く、會、吒利外出して在らず、即ち入つて曰はく、將軍馬より墜ち、將に救ふべからざらんとす、柳夫人早く來れと、柳、驚いて出づ、即ち韓が札を以て之に示し、挾んで馬に上り、絶馳して返る、座未だ罷まず、即ち柳氏を以て韓に授けて曰はく、幸に命を辱しめずと、一座驚歎す。

時に沙吒利、初めて功を立て、代宗方に之を優借す、大いに禍の作らんことを懼る、闕座因つて希逸に詣り、具さにその故を白す、希逸、扼腕奮慨して曰はく、此れ我が往日喜んで爲す所にして、後復た之を能くせりと、立ちに表を修して上聞し、深く沙吒利を罪す、代宗奏を覽て、稱敷良、久し、因つて御批して曰はく、沙吒利は宜しく絹二千匹を柳氏に賜ひ、韓翃に却歸せしむべしと、後、事罷んで間居するもの十年、李勉の大梁を鎮するに及んで、復た韓を辟して幕客とす、同職みな新進の後生、多く韓を輕んじ、目するに惡詩を以てす、韓邑々として樂まず、而して忽ち德宗が拔擢を蒙り俄に駕部郎中を以て知制誥と爲り、中書舍人に終る、知らず能く柳氏と借老せりや否や。この一段の本事、實に孟榮が筆する所、彼れ之をその友の目撃に得たりと稱す、全く斥して稗官者流の言と爲すべからず、今、韓が詩を評釋するに於て、偶、牽連して此に及ぶものは、特にその文委曲周到にして、且つ生氣あり、破睡の具と爲すに足る、且つ翃、一詩人を以て曩きに代宗の御批に依つてその妻を得、後又、德宗の御批に由つてその官を得たり、異數に非ずと謂ふべからず、取つて談助と爲す、冗漫を咎むる勿れ。

送劉侍郎

李端

幾人同入謝宣城。未及酬恩隔死生。
唯有夜猿知客恨。嶧陽溪路第三聲。

この詩指す所の事實未だ知るべからず、詩を以てこれを推すに、送る所の劉侍郎なるもの、蓋し曾て宣城の刺史の門客たり、刺史は想ふに虚懷を以て士を待つ、而してその人已に死す、劉、別れに臨んで必ず感奮歔歔自ら堪へざるものあり、因つてその情を諒し、その意を擴してこの詩を作るならん。謝眺、宣城の内史たるを以て、借つてその地を指稱す、「幾人同入」と云ふものは、宣州刺史の幕客その恩を承くるもの甚だ多きを謂ふなり、刺史今死して承恩のものみな之に報するに及はず、劉の痛恨する所當に此の如くなるべし。嶧陽溪は邳州に在り、是れ劉が客路の經過すべき處、定めて夜猿ありて客のこの痛恨を抱くを知り、三聲の悲鳴を放つて以てその哀を助くべしと言ふなり。「猿鳴三聲澗霧裳」是れ古樂府の語、而して第四聲に到つては寸腸斷絶して死すと傳ふ、この詩「第」の字を用ふ亦この意、聲々相逼りて客涙を促すものあるが如きものを狀するなり。

唐仲言上二句を解して曰はく、劉侍郎曾て宣城に居り、賓客從遊のもの多し、未だ酬恩に及ばずして輒ちみな散じ去ると、然かれども果して劉を實指するものならんには、當に死生を隔つと謂ふべからず、故に従はず。

端は李嘉祐の姪、趙州の人なり、少時廬山に居り、僧皎然に依つて書を讀む、意況清虚にして酷だ禪侶を慕ふ、清羸多病を以て官を辭し、田園を虎邱山下に買うて以て居る、後ち、移つて衡山に隠れ、自ら衡岳の幽人と號し、彈琴讀易、登高望遠、神意泊然たり。その詩十才子中に在つては、亦殊に錚錚たるもの、初めて長安に来るや、詩名已に大いに振ふ、時に郭曖昇平公主に尙す、端その館中に在り、曖嘗て進官し、賀宴を開く、酒酣にして公主端に屬して詩を賦せしむ、頃刻にして就る、曰はく、「青春都尉最風流。二」

十功成便拜侯。金距闘雞過上苑。玉鞭騎馬出長楸。薰香荀令(或)偏憐小傳粉。何郎(晏)不解愁。日暮吹簫楊柳陌。路人遙指鳳凰城。公主甚大喜。一座賞敷。時に錢起亦席に在り、曰はく此れ必ず端が宿製ならん、請ふ起が姓を以て韻と爲せと、端立ろに一章を獻じて曰はく、方塘似鏡草芊芊。初月如鈎未上弦。新開金埒看調馬。舊賜銅山許鑄錢。楊柳入樓吹玉笛。芙蓉出水妬花鈿。今朝都尉如相顧。願脫長裾逐少年。作者驚伏し、錢、亦顔色なし、公主厚く金帛を賜ひ、終身之を榮とす。

楓橋夜泊

張繼

月落烏啼霜滿天。江楓漁火對愁眠。姑蘇城外寒山寺。夜半鐘聲到客船。

この詩歐陽一六(節)一たび夜半は鐘鳴の時に非ずとの説ありしより(一六詩話には説者亦云となつてある)、終に聚訟の案を激し、或は半夜鐘を以て蘇地の鐘名なりと爲すものあるに到る、穿鑿紕繆みな詩義に當なし、而して冬烘の村學、或は猶ほ宋人の詩話に就き、その一章一條を擧げて斤斤として人に誇示するものあり。豈に笑柄に非ずや。且つ夜半の鳴鐘と否とを問ふこと勿れ、詩明らか「夜半鐘聲到客船」と云ふ、我は此に由つて夜半に鐘聲あ

るを知るのみ、且つ鐘名の眞偽を辨ずるを休めよ、蓋し繼がこの作一時に傳誦したるを以て、後人竟に寒山寺の鐘に被らしむるにこの名を以てしたるのみ、繼が再び楓橋に泊するの詩「烏啼月落江村寺。欹枕猶聽半夜鐘。此れ適、前游を追想して之を言に形す、因つて而して後人の命名して以て記念に表するの意を喻るべきなり。胡んぞ膠柱することをか爲る。

「江楓漁火對愁眠」七字即ち是れ楓橋夜泊の正文、已に愁眠と曰ふ、展轉眠り着せずして客夜の明け難きを恨むの意あり、忽ちにして月落ち烏啼き、忽ちにして霜氣天に滿つ、窈かに謂ふ東方將に白からんとすと、旋、寒山寺裏の鐘聲を聞く、屈指すれば猶ほ是れ夜半のみ、宋の柳永が雨淋鈴に云はく、「今宵酒醒何處。楊柳岸。曉風殘月。此時の情緒太だ畢似せるを覺ゆ。若し謂ふ夜半は月落烏啼の時に非ずと、此れ猶ほ歐九が夜半に鐘鳴なしと云ふと齊しく、信を詩語に取らずして、卻つて理を以て相格す、所謂疑ふべからざるを疑ふものなり、何ぞ與に詩境を語るべけん。

張繼は字は懿孫、天寶十二年の進士にして、早く詞名を振ひ、頗る氣節に矜る、感懐の詩あり云ふ、「調與時人背。心將靜者論。終年帝城裏。不識五侯門。以てその志氣を見るべし、皇甫冉と相得て、契巖玉に逾ゆ。冉に秋夜嚴維の宅に宿するの詩あり、「昔聞玄度宅。門向會稽峰。君住東湖下。清風繼舊蹤。秋深臨水月。夜半隔山鐘」と、此れ亦繼がこの篇夜半鐘聲と相發明するに足る、論ずるもの云ふ、繼が詩、彫せずして自ら飾る、丰姿清逸、道者の風ありと、大曆間、内に入りて侍仕し、檢校祠部郎中に終ふ。

清の王阮亭、姑蘇に至り、舟楓橋に泊し、寒山寺を過ぐ、夜已に曠黑、風雨雜遘す、阮亭衣を攝し履を着

け、列炬して岸に登り、徑に寺門に詣り、詩二絶を題して去る、一時以て狂とせり、その詩に云ふ、
 日暮東塘正落潮。孤篷泊處雨瀟瀟。疎鐘夜火寒山寺。
 記過吳楓第幾橋。

又、

楓葉蕭條水驛空。

離居千里恨難同。

十年舊約江南夢。

獨聽寒山半夜鐘。

(帶解堂集卷九、夜山題
寒山寺寄西樵僧古二首)

詩の秀俊にして遠神ある、實に多く唐賢に譲らず、近代の絶句、獨り阮亭を數ふ、洵に故あるなり。後大

十年飽冠亭(以)亦楓橋に泊し、阮亭の事を懐ふあり、吟じて云はく、

路近寒山夜泊船。

鐘聲漁火尙依然。

好詩誰嗣唐張繼。

冷落春風六十年。

詩地名を用ふ、各、宜しき所あり、陳伯璣嘗て阮亭に謂つて曰はく、「姑蘇城外寒山寺。夜半鐘聲到客船。」

此れ亦詩地と肖たり、若し「南城門外報恩寺」と謂はゞ豈に笑ふ可からずやと、阮亭因つて謂ふ、此れ謔語と

雖も詩家の三昧を悟るべし、古人の句、「流將春夢過杭州」「滿天梅雨是蘇州」「白日澹幽州」「黃雲畫角

見并州」「二分無賴是揚州」(此一句原)「澹煙喬木隔綿州」「曠野見秦州」「風聲壯岳州」の類、風味各、そ

の地に肖たり、みな移易すべからず、若し「白日澹蘇州」又は「流將春夢過幽州」と云はゞ、捧腹絶倒せざ

るものある耶。この事阮亭屢、自らその詩話に書す(帶解堂詩話)、平生得意の談たるを知る、従つて阮亭が詩

派を悉すべきものあり、因つて附録す。

聽角思歸

顧況

故園黃葉滿青苔。

夢後城頭曉角哀。

此夜斷腸人不見。

起行殘月影徘徊。

起一句即ち是れ陶淵明が「田園將蕪」(歸去)の意、黃葉青苔、定めて已に堆積す、而して歸期未だ

トせず、偶、故園を夢むも、亦城頭哀角の爲に驚醒せらる、乃ち竟夕愁思、客腸を斷盡して、人の之を見るな

し、但、殘月の下に起行して影と徘徊するのみ、極めてその無聊を寫す。題面「思歸」の二字之を句中に藏

して顯言せず、尤も旨味あり。

顧況、字は通翁、蘇州の人、性、恢諧にして王公の貴と雖も、之と交するものは必ず之を戲侮すと云ふ、

白居易の始めて刺を通じ調を請ふに當りて、初め遽かに長安居り易からずと云うて、之を斥く、春草の詩を

讀むに及んで、大いに稱賞を加ふと雖も、その天性實に此の如きものあるなり。德宗の時柳渾・李泌相尋いて

輔政の職に居る、況、素と二人と相善し、自ら謂ふ、當に達官を得べしと、久しうして方に著作郎に還る、快

快として樂まず、泌の卒するに及び、海鷗詠を作つて同列を調笑して云はく、「萬里飛來爲客

鳥。曾蒙丹鳳借枝柯。一朝鳳去梧桐死。滿目鷗鷺奈爾何。」と、此を

以て大いに嫉む所と爲り、憲司の劾奏に遭うて、饒州の司戸に貶せらる、この詩角を聽いて郷を思ふ、惻愁

悽絶、其れ亦返後の作なる歟。

宿昭應

武帝祈靈太乙壇
那知今夜長生殿

新豐樹色繞千官
獨閉空山月影寒

漢武を以て玄宗を指斥するの唐人の慣例たるは已に屢、之を言ふ。玄宗天寶七載、會昌を改めて昭應と爲す、その地本と新豐と稱す、此に於て溫泉宮を治め、京兆に屬せしむ、所謂華清宮・朝元閣・長生殿等みなその中に在り、朝元閣は即ち玄支老子を祀るの處、因つて太乙壇を以て之に比す、蓋し漢武曾て壇を築いて天帝太乙を祈る、その事甚だ相類せるを以てなり、長生殿は齋殿なり、朝元閣に事あれば、帝則ち此に齋沐す、彼の楊妃と女牛を指して密誓の處即ち是れなり。

上半は昔日祀典の盛、後半は今日荒廢の狀、玄宗祈靈の時千官扈從して、儼として清都太微の如し、那ぞ知らん、今夜空山月寒うして殿門獨り閉づ、樹色千官の日に視れば、眞に河漢の如し、盛衰常無く、興廢時あり、當時祈る所の靈ぞ、只虚に殿名の生長を贏ち得たるのみ、歎ぜざるべけんや。下二句最も蘊藉、那知の字、「獨」の字殊に切要に關す。この詩亦李紳の集に入る。

顧況、洛に在るとき、閒に乗じて三詩友と御苑の中に遊び流水の上に坐す、大梧葉を得たり、上に題詩あり、

「一入深宮裏、年年不見春。柳題一片葉、寄與有情人。況、明日上

游に於て、亦葉上に題し、波中に放つ、詩に曰はく、「花落深宮鶯亦悲。上陽宮女斷

腸時。帝城不不禁、東流水。葉上題詩欲寄誰。後十餘日、人あり、苑中に於て春を

尋ね、又葉上に於て詩を得たり、以て況に示す、その詩、「一葉題詩出禁城。誰人酬和

獨含情。自嗟不及波中葉。蕩漾乘春取次行。」

湖中

青草湖邊月色低
丈夫飄蕩今如此

黃茅瘴裡鷓鴣啼
一曲長歌楚水西

青草湖は、洞庭の南に在り、饒州に近し、此れ亦饒州司戸左遷中の詩なり、黃茅瘴は南土の惡氣、夏之を青草瘴と云ひ、秋之を黃茅瘴と云ふ、鷓鴣も亦南方の鳥、その啼聲「行不得哥哥」と云ふもの、如し、窮途之を聞く、殊に堪へざる所、故に接するに丈夫飄蕩を以てす、而かも況の人と爲り已に悵諧にして細事に拘せず、必ず榮辱に屑屑たらざるものあるべし、「一曲長歌楚水西」自ら丈夫の氣概を見る、猶ほ狂奴故態あるなり。

相傳ふ況、謫官の後、全家去つて茅山に隠れ、金を鍊り斗を拜して身輕うして羽の如く、終に長生の訣を

得て仙し去ると、その茅山に在る、自ら華陽真逸と號す、華陽集二十卷、皇甫湜之が序を作る、所謂逸歌長句、駿發踔厲、往往天心を穿ち月脇より出づるが如く、意外人を驚かすの語、尋常の能くする所に非ずとは、推稱甚だ過ぐ、然れども亦卓然家を成すものなり。酉陽雜俎に載す、顧況暮年に子を失し、之を哭して慟す、その子の魂、冥漠中に在つて父の吟苦を聞くに忍びず、乃ち再生す、之を非熊と名づく(卷十三)、此等上の紅葉題詩の事と共に、多くは好事の者の附託に出づ、本と信據するに足らず、唯、傳説已に久しきを以て姑く之を詩下に繋ぐ。

夜發袁江寄李穎川・劉侍郎

戴叔倫

半夜回舟入楚鄉。
孤猿更叫秋風裏。

月明山水共蒼蒼。
不是愁人亦斷腸。

本集題下に自注あり、時に二公流貶して此に在りと、この詩舟行の情景を述べて以てその人に寄す、「月明山水共蒼蒼」は兼葭秋水、伊人宛在の意あり、二人に寄するの思、即ちこの中に在り、孤猿秋風、愁人ならざるも亦斷腸す、況や二公はみな遷客にして我れは則ち羈人なるをや、叔倫、字は幼公、蕭穎士の門下、夙に冠冕を以て稱せらる、傳に云はく、詩興悠遠にして、作ごとに人を驚かすと、この詩に視て亦悠遠の語を誤らざるを徴すべし。

寄楊侍御

包何

一官何幸得同時。
今日莫論腰下組。

十載無媒獨見遺。
請君看取鬢邊絲。

句何はその弟佖と共に詩を以て名あり、時に二包と稱す、嘗て詩法を孟浩然に受く、師承淵源の自古するを見るべし、天寶七年楊譽の榜に及第し、大曆中に仕へて起居舍人に終ふ、その官甚だ達せず、所謂「十載無媒獨見遺」なり。此に由つて推せば、楊侍御は即ち所謂楊譽その人なる歟、同時に及第して官を得る獨り遅し、今日僅かに組綬を腰下に繋ぐを得たるも、頭髻已に星星として官情漸く灰す、因つて後時の歎を書して以て楊に寄するのみ、或は此を以て薦達を侍御に求むるものとす、細かに三四の語を玩すれば、則ち未だ然らざるに似たり。

汴河曲

李益

汴水東流無限春。
行人莫上長堤望。

隋家宮闕已成塵。
風起楊花愁殺人。

汴水は隋煬帝が開鑿する所、河畔に於て道を築き、楊柳を植ゑ、離宮四十餘所を置き、錦帆採繭以て巡遊に供す、この詩汴河曲を以て題と爲す、亡隋を傷むなり。汴水東流して春色限り無し、風景好しと雖も、宮闕は已に塵と爲る、往日の豪奢何にか在る、惟、楊花の風に飄へるあるのみ、按ずるに楊は隋の國姓、而して今飄蕩着なし、尤も酸鼻すべし。詩は目前の實景を點すと雖も、亦暗にこの義を含めり。

隋の大業九年、煬帝將に再び江都に幸せんとす、迷樓の宮人あり、聲を抗げて夜歌うて云はく、「河、南、楊、柳、謝。河、北、李、花、榮。楊、花、飛、去、落、何、處。李、花、結、果、自、然、成。」帝之を聞いて披衣して起ち、宮女を召して之を問ふ、答へて曰はく、臣に弟あり民間に在り、因つてこの歌を得たり、道途の兒童多く之を唱ふと、帝、默然たり。蓋し李は即ち唐の國姓たるが故なり(註釋)。その後隋宮を詠ずるもの多く李花を用ふ。

聽曉角

邊霜昨夜墮關榆。

吹角當城片月孤。

秋風吹入小單于。

榆塞は蒙恬の築く所、樹うるにこの樹を以てす、故に亦榆關と云ふ、「邊霜昨夜墮關榆」は曉を寫し、承句に角を實點す、三四極めて角聲の悲を狀す、是れ聽く者の眼中耳中なり。唐の樂府、角曲に大單于・小單

于あり、結句曲名を取りて、之を單于の地の義に換用す、猶ほ杜少陵、吹笛の詩の折柳に於ける、李太白、黃鶴樓の篇の落梅花に於けるが如きなり、南飛の塞鴻その聲の悲慄なるに驚き、肯へて飛び度り去らず、悲哉の秋風、一時に小單于の地に吹滿す、聽く者誰れか能く此に堪へん。以下の三詩みな聲調凄壯を以て勝る、此れは是れ十郎の絶調なり。

「吹入小單于」唐仲言は只、「風小單于の曲を吹いて我が營中に入る」と謂ふ甚だ味なし、蕉中は「雁の却飛して胡天に入る」ものとす、錢起が歸雁の詩意を以て之を解す、工に似たりと雖も、その本意を失す。

夜上受降城聞笛

回樂峰前沙似雪。

不知何處吹蘆管。

受降城外月如霜。

一夜征人盡望鄉。

沈德潛、李益の「回樂峰前」、柳宗元の「破額山前」(曹侍御過、劉禹錫の「山園故國」(石頭)、杜牧の「煙籠

寒水」(滄溟)、鄭谷の「揚子江頭」(淮上別)を以て、氣象殊絶なるものとし、以て滄溟・鳳州及び阮亭が定むる

所の唐絶の脈卷に接武せしめんとす(詩評)。(二百六十七頁)。(及二百三頁)。洵に益がこの篇の情悽絶人にして神情俱に遒緊なる、歸愚が賞識を枉げずと謂ふべし。沙磧茫茫沙月相映す、身をその間に置く霜雪の中に坐するが如く、寒意凄然として禁せず、況や蘆管の悲聲人に通つて墮淚せしむ、邊塞の征人、殆ど盡く郷を望まざるを得ん

や。その瀟蕭宛轉たるは眞に樂府の絶唱と爲すに足る、教坊の樂人此を取つて聲樂として曲を度し、又繪がいて圖畫を爲すものあり、當時に重んぜらるゝ亦知るべきなり。

從軍北征

天山雪後海風寒。
積裹征人三十萬。

橫笛偏吹行路難。
一時回首月中看。

亦前二首と同一の意況、但、三十萬の征人、一時に回首す、造語雄偉にして、音調諸婉、月中引領の態度亦能く描寫して神に入る、此れ本篇の特得たり。末韻、看の字、妙に廻身却立一時茫然たるの狀を寫す、或は解して吹笛の人を看るとし、或は以て望郷の義とす、俱にその神理に考へずして之を形跡に求む、拖泥帶水たらざらんと欲するも得べからざるなり。

楊柳枝詞

劉禹錫

楊帝行宮汴水濱。
晚來風起花如雪。

數株楊柳不勝春。
飛入宮牆不見人。

楊柳枝の詞は白樂天に昉まる、詩凡そ十首、一時に傳誦して新聲を以て稱せらる、是に於て乎夢得その體に倣ひ、亦楊柳枝九章を作る、每首みな楊柳を以て興と爲し反覆詠歎の意を見る、本篇即ちその一なり。楊帝の事に見ゆ。「不勝春」の三字無限の傷神、猶ほ李白が「菱歌清唱不勝春」(蘇州)と一般、語實に此に本づくなり、晚來風起つて點點の楊花雲の如く、飛んで宮牆に入るは昔日に異ならざるも、人は已に非なり、尤も感愴すべし、李君處が汴河曲と並誦して、軒輊を分ち難し、並に中唐の妙選に屬す。

宋の謝疊山之を解して曰はく、楊帝荒淫不君、國亡び身喪ふ、行宮外の殘柳數株、枝條柔弱にして春風の搖蕩に勝へざるが如く、柳花雪の如く、飛んで宮牆に入る、時人を見るを羞づるものに似たり、隋の臣子唐に仕へ、曾て國亡び主滅しその咎を分任することを曰はず、揚揚然として羞惡の心なし、柳花に觀れば亦媿づ可しと。詩中初めこの義なく、「不見人」を解する尤も苦なり、然れどもこれ果して疊山の手に成らんに、眼に宋社の屋するを見て、降表僉名のみな天水の朝士なるを慨し、夢得が詩を借つて自己の磊塊を寫したるのみ、その意殊に憫傷すべし、故に附存す。

樂天が楊柳枝尤も傳ふべきものを擧ぐれば、
一樹春風萬萬枝。嫩於金色軟於絲。永豐西角荒園裏。
盡日無人屬阿誰。

又
紅板江橋青酒旗。館娃宮暖日斜時。可憐雨歇東風定。
萬樹千條各自垂。

劉詩、本篇の外
花夢樓前初種時
露葉如啼欲恨誰

美人樓上闌腰支

如今拋擲上街裏

又
城外春風滿酒旗
唯有垂楊管別離
みな余が酷だ愛誦する所なり

行人揮袂日西時

長安陌上無窮樹

浪淘沙詞

鸚鵡洲頭浪颭沙
銜泥燕子爭歸舍

青樓春望日將斜
獨自狂夫不憶家

浪淘沙も亦唐の教坊の曲名、此れ亦劉・白の二人に昉まる、未だ孰れか先なるを知らず、想ふに劉は亦九首あるも白は則ち六首のみ、此を以て夢得に創すと定むるも、未だ武斷と云ふを得ざるべし。每章みな浪沙の二字を用ひ、興を二者に取りて以て征人思婦の懷を述ぶ、質俚中に古意を見ることが、ほほ竹枝の體に同じ、宋の詞牌名に浪淘沙あり、又浪淘沙令・浪淘沙慢あり、蓋し舊曲名を借りて別に新腔に倚れるなり、本篇の

意謂ふ、鸚鵡洲頭、濁浪沙を颭かす、且つ來り且つ去るの意あり、夫唱婦隨の思あり、思婦青樓に在りて待つて日斜に到るも、その人は則ち來らず、故に銜泥の燕子の舍に歸りて雙宿するを羨み、狂夫の家を憶はざるを恨む、「獨自」の二字、上句を緊接して以て狂夫に頂す、語意殊に怨、

此の外の諸作、

九曲黃河萬里沙	浪淘風簸自天涯	如今直上銀河去
同到牽牛織女家	洛水橋邊春日斜	碧流輕淺見瓊沙
無端陌上狂風急	驚起鴛鴦出浪花	濯錦江邊兩岸花
春風吹浪正淘沙	女郎剪下鴛鴦錦	將向中流定晚霞
八月濤聲吼地來	頭高數丈觸山迴	須臾却入海門去
卷起沙堆似雪堆	流水淘沙不暫停	前波未滅後波生
令人忽憶瀟湘浦	迴唱迎神三兩聲	

この類、命意各、同じからざるも、浪沙の二字を離れず、以て命名の義を曉すべし。

竹枝も亦劉・白の兩家に成る、而して劉の自序に曰はく、竹枝は巴飲なり、余建平に來るに里中の兒竹枝を聯歌し、笛を吹き鼓を撃つて以て節に赴く、含思宛轉として淇澳の豔あり、故に余竹枝詞を作ると、此れに據れば劉の首唱たること明らけし。憲宗の時、王叔文敗れて入司馬の貶あり、劉時に朗州の司馬に貶せらる、地本と夜郎の夷に近く、俗巫鬼を信ず、竹枝は即ち祈神の曲、鼓吹俄延してその聲儉儉、因つて騷人九歌の例に依り竹枝新詞九章を作り、里中の兒をして之を歌はしむと云ふ、是れこの體は浪淘沙の浪沙を借り楊柳

枝の楊柳を借りて興を爲すと同じからず、而して竹枝の名ある所以は巴歛の原辭所謂儂儂の音なるもの、毎句に「竹枝」「女兒」の和聲ありて以て節と爲すが故なり、その原詞は一たび禹錫の改定を経て、復た見るべからざるも、皇甫松并に孫光憲が集中に存する所の竹枝、猶ほその遺風ありて想像するに足るべし。皇甫が集中凡そ二首、その一

芙蓉並帶枝一心連兒花侵榻子眼應穿兒

その二

山東桃花谷底杏花窈窕相映兒

孫光憲が集中に在るもの、

門前春水白桃花兒岸上無人枝小艇斜兒商女經過江欲暮兒散拋

殘食飼神鴉兒

蓋し一人之を唱へて毎句第四字に至れば、衆人群然附和して「竹枝」と唱へ、第七字に至れば、亦前の如くして「女兒」と唱ふ、此を以て節奏と爲して詩義には毫末にも相關せず、今劉・白の集その和聲を刪り去つて録せず、祇題して竹枝詞と曰ふ、是を以て多く初學の感を生ぜり、竹枝詞は本選録入に及ばざるも今類に由つて附記を加へ、聊かために此を辨す。

自朗州至京戲贈看花諸君子

紫陌紅塵拂面來
無人不道看花回
玄都觀裏桃千樹
盡是劉郎去後栽

劉禹錫・柳宗元俱に王叔文に黨し、その信任を受く、故に叔文、權勢を得て、大いに朝廷の秘策を議するに當りては、二人なるもの實に與り聞かざるは無し、憲宗立ちて叔文の黨一敗して地に塗る、是に於て八司馬の貶あり(頁七十一)、韓昌黎、夢得・子厚の二人に於て本と文詩の友たり、而してその作る所の永貞行、實に二人のためにその罪惡を諱まず、亦以てその王に黨し、挾邪亂政の跡、掩ふべからざるものあるを知るに足るべし。時に劉は連州に貶せられ、尋いで又、改めて朗州の司馬に補せらる、居ること十年にして宰相その才を憐むものあり、終に柳と俱に召還せられ、將に南省郎に補せられんとす。時に長安の玄都觀に道士あり、その手植の仙桃觀に滿ち、盛んなること紅霞の如し、夢得乃ち戲れに、この詩を作りて以て一時の事を紀す、然れども詩意の在る所は當時滿朝の新貴の揚揚得意の態あるを刺り、みな我が後輩なりと指斥したるもの、如し、是に於て當路の者その讒忿に類するを扶摘し、再び播州に謫せらる、この時柳も亦同貶す、禹錫が母の老いたるを以て自ら之に易はらんとし、裴度も亦之が爲に救解する所あり、則ち又連州に易へらる(頁七十一)。此れは、これ本篇の本事、劉が再游玄都觀の詩の序、自ら之を記して而して唐史も亦その事を書す、然るときは夢得がこの詩未だ甚だ輕薄なるを免れず、再貶の禍は實に自ら取るものなりと謂はざるを得ず、辛文房曰はく、公才を恃んで放心す、平行すること能はずと(子傳)、人物を以て論ずれば、誠に此の如きも

のあり、而して詩文の才は寔に一時に冠絶す、尤も多く白樂天と唱和し、劉白唱和集と號す、又、裴度と唱和して汝雒集あり、合孤楚と唱和して彭陽唱和集あり、李德裕と唱和して吳蜀集あり、樂天毎に推して詩豪と爲し、金陵の懷古、獨り驪珠を以て之を目し、又劉君の詩は在處に神物の護持するありと云ふ。その詩含蓄足らざるものもあるも精説は餘あり、盼々たる氣骨は殊に元・白の上に出て、古文も亦恣肆博辨にして、韓柳の外自ら軌轍を爲す、驚才風逸と謂はざるべからざるなり。

この詩謝疊山の解之を得たり(按ずるに謝疊山が絶句解注は或は元人の偽作に出づると云ふ、然れども近頃の阮雲臺、曰はく、(元)探つて四庫未收書目録中に入れ、能く唐詩書外の旨を得たりとす、今又之に従ふ)、曰はく、富貴に奔趨するものは塵埃に汨没して、自ら志を得たりと謂ふ、春日花を看てその實紅塵滿面なるが如し、支都觀は朝廷に喩へ、桃千樹は富貴新進の無能なるものに喩ふ、「盡是劉郎去後栽」とは滿朝の新貴無能なるものはみな劉郎が國を去る後、宰相の栽培したるものなるを謂ふなりと。劉郎は禹錫自ら言ふ、然れども天台桃源の故事に劉晨あり、因つて桃花の上に關合したるものなり。

劉已に此詩に由りて再び連州の刺史と爲り、又、夔州に徙り、後、和州に改む、十四年を経て漸く入つて主客郎中と爲る、是に於て重ねて支都に遊ぶに、蕩然として復た一樹なく、唯、兔葵燕麦の春風に動搖するのみ、因つて再び一絶句を題して云はく、
 百畝園中半是苔。
 前度劉郎今又來。
 桃花淨盡菜花開。
 種桃道士今何在。
 蓋し文宗の朝互に朋黨を爲し、一相位を去れば、朝士盡く易る、恰も走馬燈の如し、この詩云ふ「百畝園中半是苔」と明らかに朝廷人なきなり、「桃花淨盡菜花開」前宰相用ふる所の人盡く斥逐に遭うて、新宰相

の黨方に時を得たるを謂ふ、「種桃道士今何在。前度劉郎今又來。」前日の宰相、私人を培植したるもの今死して、己れ又偶々來りて菜花の時を得顔なるを見る、洵に笑殺するに堪へたりと、その詩出づるに及んで當時の權貴復たその輕薄を惡む、故に俄かに東都に分司するの命あり、是れ實に膾を吹くを笑うて却つて變に懲ることを忘れたるもの、而して夢得の人と爲り、想ひ半に過ぐべきなり。

與歌者何戡

二十餘年別帝京。
 重聞天樂不勝情。
 舊人唯有何戡在。
 更與殷勤唱渭城。

何戡は想ふに當時宮廷に出入する所の樂工の名、故にその唱ふる所の曲を謂つて天樂とす、夢得朗州に貶せらるゝもの十年、又連州に謫せらるゝもの十四年、今前後を通算す、是れ「二十餘年別帝京」なり。朝臣故舊、蕩盡して跡なきこと、一に支都の桃花の如く、惟、一つの何戡の在るあり。渭城は即ち陽關の三疊、以て別れに贈るもの、兩度國を去るとき、饒別のものみなこの曲を唱ふ、今日幸に生還して、何戡更にために昔年送別の歌を奏す、逆境を回思して那んぞ追憶に堪へんや。承句「不勝情」の三字、即ち以て前後を通串す。

夢得尙ほ舊宮人穆氏が唱歌を聴くの一絶あり、

會隨織女渡天河。 記得雲間第一歌。 休唱貞元供奉曲。

此本篇と共に「桃花淨盡菜花開」の意、之を詩語に形する已に一再のみならず、權貴の側目する所と爲るは、豈に已むことを得んや。

夢得の主客郎中と爲るや、前詩の爲に又貶小せられ、後、裴度の薦を以て集賢直學士と爲るも、度、相を罷めて、出でて蘇州の刺史と爲る、時に司空李紳京に在り、夢得の名を慕ひ邀へて第中に至り、厚く飲饌を設く、酒酣にして妙妓に命じ歌うて之を送らしむ、劉席上に於て詩を賦して曰はく、「低鬟梳頭宮樣粧。春風一曲杜韋娘。司空見慣渾閒事。斷盡蘇州刺史腸。李、因つて妓を以て之に贈る。前卷この事を引いて誤つて韋蘇州に繋く(上卷二十)、蓋し蘇州刺史に由つて混じて一と爲せしなり。全く予が暗記の疎漏に坐す、爰に遙かに訂正を加ふ。

夢得蘇州に刺史たるの日稍、功績の見るべきものあり、因つて金紫服を賜ひ、汝・同の二州に累轉して太子賓客に遷る、故に今傳ふる所の集、劉賓客集と號す、復た會昌の地方を分司し、檢校禮部尙書を加ふ、卒する年七十二、戸部尙書を贈る。

劉が絶句は美收するに暇あらず、然れども絶唱、
山園故國周遭在。 潮打空城寂寞回。 淮水東邊舊時月。
夜深還過女牆來(石頭)。

の如きは必ず甄録せざるべからざるもの、而して本選には之れ無し。又、本選の原本は、楊柳枝詞の下に贈

何巖を録し、次に浪淘沙、最後に玄都の一首を載す、作者の時代と事蹟とを以て、相照らして之が評釋を試みんには、前後倒置して大いに不便なるものあり、故に爲に改易を加ふ。

涼州詞

張籍

鳳林關裏水東流。 白草黃榆六十秋。
邊將皆承主恩澤。 無人解道取涼州。

此れ邊將の坐して旌旄を擁して、終に眞心朝家の爲に效力するものなきを慨す、鳳林關は臨洮に在り、黃河を隔て、遙かに涼州と接す、涼州は玄宗の開拓するところ、舊解に云ふ、その地後、六十年にして吐蕃の爲に陥る、白草黃榆の地、中國の領有と爲るもの僅かに六十秋のみと、此れ或は當に然るべし。主恩甚だ重く、みな勳名を驕關に標して、而して竟に一人の涼州を恢復せんことを稱道するものなし、是れ唐制藩鎮の極弊たり。三四痛切の至と謂ふべし。

張籍亦韓門君子中の錚錚たるもの、韓の薦を以て國子監博士と爲る、而して性、狷直、韓に責諷する所殊に多し、王建と齊名して別に新樂府の一體を創し、張・王と稱す、その措詞淺顯を主とすと雖も、元・白の樂府に視れば猶ほ古意多く、談藝のもの之を廢する能はず、故に白の贈詩に云ふ、「張公何爲者。業文三十春。尤攻樂府詞。舉代少其倫。」(古樂府)、又、姚合の贈詩に云ふ、「妙絕江南

曲。凄涼怨女詞。古風無敵手。新語是人知。劉後村の詩話に白はく、張籍の樂詞は清麗深婉、五言律詩も亦平淡愛すべし、七言詩に至つては則ち質多く文少れ、材各宜あり、強ひて文飾すべからずと。

十五夜望月

王建

中庭地白樹棲鴉。冷露無聲濕桂花。

今夜月明人盡望。不知秋思在誰家。

建が宮詞に工なるは人の能く知る所、而して張・王之樂府、格幽に思遠く、別に機軸を出す、于麟並に選し及ばずして、兩家各、その不經意の絶句一章を採る、亦甚だ解すべからず。この詩「地白」「桂花」並に月明を醒透して、第三句に至つて初めて之を點破す、結句は猶ほ「馬首東來知是誰」と同じく、月を望み秋に感ずるもの、恐らくは我に如くものなかるべしとの意なり。建、字は仲初、初め亦韓門に出入す、潁川の人、籍、字は文昌、和州の人。

送盧起居

武元衡

相如擁傳有光輝。何事闌干淚濕衣。

舊府東山餘妓在。重將歌舞送君歸。

盛唐以後、宰相にして工詩なるもの首として武元衡を數ふ。元衡、字は伯蒼、河南の人、その詩時に雕鐫を見ると雖も、機構を動かさず、好事のもの之を傳へ、絲竹に被らしむるに至る。この詩「相如擁傳」の事を用ふ、即ち司馬相如の蜀檄を傳ふるの事、想ふに盧起居は出て、蜀中に官するものならん。盧已に地方委任の重職を帶ぶ、尋常の別離に同じからず、故に第二句悲傷する無きを以て之を勸め、三四はば謔意を帶んで豪宕の語を爲す、即ち送別の常套を翻新するに在るなり。東山の餘妓、謝安石の事、習用の典なるを以て、注目を加へず。

嘉陵驛

悠悠風旆遶山川。

山驛空濛雨作煙。

路半嘉陵頭已白。

蜀門西更上青天。

伯蒼、元和三年、門下侍郎平章事を以て、出て、劍南の節度使と爲る、此れその途中嘉陵驛に次して作る、

即ち是れ蜀道難の意なり。山行既に遠くして、煙雨空濛、今この驛に至る、僅かに行程の半を了せしのみ、然れども登陟の難き、既に人髪をして白からしむ、これよりして西、蜀門の險真に李謫仙が所謂「難於上青天」(蜀道)なるものあり、知らず將た何を以てか之に堪へんや。「白頭」「青天」句中に映合す、初め意なくんば非ずして、妙自然に造れり。

武、後、復た入つて政を乗る、明年賊あり、之を早朝の途に要刺し、竟に凶刃に斃る。夏夜の詩を作つて云はく、「夜久喧暫息。池臺惟月明。無因駐清景。日出事還生。」と、その聖害に遇ふ、人以て詩識なりとす。時に左贊善白居易、奏じて急に逆賊を捕へ、以て國恥を雪がんことを請ふ、韋貫之等の黨、反つてその位を出て、妄言するを怒り、乃ち白が舊過を尋ねて之を參劾し、白を潯陽に貶す、江州の司馬をして、天涯倫落の涙をその青衫に灑がしむるもの、その原因を究むれば實に亦此に在るなり。傳に稱す、工詩にして宦達するものは惟、高適、達官にして詩工なるものは惟、武元衡のみと、惜しいかな賊手に隕命し、未だその至る所を極めず。

漢苑行

張仲素

回雁高飛太液池。
年光到處皆堪賞。

春花低發上林枝。
春色人間總未知。

題して漢苑と言ふ、託して以て意を見る、詩蓋し唐の宮園を詠するなり、太液池上、回雁高く飛び、上林の花枝、高低盡く發す、洵に是れ天上の韶景、到處賞するに堪ふべからざるものなし、古の聖王は民と樂を偕にして、而して今日爾許の春色、人間實に未だ之を知らず、至尊に貴ぶ所のもの豈に獨樂に在る耶。唯、その春色の適かに殊なるを寫して、この意自ら言下に在り。

張仲素、字は繪之、貞元十四年の進士、朝中に援なきを以て下僚に沈滞し、二十年に及んで始めて翰林學士に除せらる、韋貫之の忌む所と爲り、云はく、學士は顧問に備ふる所以、宜しく専ら詞藝を取るべからずと、此を以て罷む。憲宗盧綸の詩文を愛し、勅してその遺草を索む、仲素編集して之を進む、後、中書舍人を拜す。

塞下曲二首

三戍漁陽再度遼。
匈奴似欲知名姓。

醉弓在臂箭橫腰。
休傍陰山更射鵬。

此れ老将の邊を成り、將に微行して敵を擒にせんと欲する者に就いて言ふなり、この老将、三たび漁陽を成り、再び遼水を度る、本と是れ知名の宿將たり、今假りに獵裝を爲して以て敵地に入り、將に陰に計る所あらんとす、力めて敵に覺られざらんことを欲すと雖も、機敏なる匈奴は早く已に之に屬目し、その名姓を

知らんと欲するものゝ如し、故に若し一たび陰山に向つて飛鷹を射ん乎、その神技は忽ちこの老宿將たるを看破する所と爲り、今日の微行却つてその功を奏する能はざらんとす、是を以て之を休止するの詞を爲すなり。陰山射鷹、漢の李廣傳中の事を用ふ、亦習見の典たり、驃弓は赤牛角の弓。

其二

朔雪飄飄開雁門。平沙歷亂捲蓬根。
功名耻計擒生數。直斬樓蘭報國恩。

この首、老将の心事に就いて言ふ、風沙を冒し、霜雪を凌ぎ、深く敵地に入つて艱險を憚らざるものは、その意固より徒らに擒生の數を計較して虚に功名を耀せんとするに在らず、直ちに樓蘭王を斬り敵首を僵し禍根を絶ちて以て國恩に報せんと欲するのみ。當時の邊將、多く良民を誣ひて賊となし、斬獲の多きを貪り、争つて虚捷を朝廷に聞す正に張文昌が所謂「邊將皆承主恩澤。無人解道取涼州。」もの、比々みな然り、この詩因つて之を反説して、兼ねて杜が「射人先射馬。擒敵須擒王。」(前出)の意を用ふ、最も婉曲にして回味に耐へたり。樓蘭王は此れ少伯の詩と共に漢書傳介子の傳を用ふ、「功名耻計擒生數」千古貪功のものゝために一針を下す、字字みな芒ありと謂ふべし。

秋閨思

碧窗斜月靄深輝。愁聽寒螿淚濕衣。
夢裏分明見關塞。不知何路向金微。

上二句「秋閨」を寫し、その下直ちに「思」の字に接す、夢に關塞を見ると雖も、正に夫が成る所の何の路なるやを知らず、造語命意俱に妙。金微は山の名、塞外に在り、李白の詩に「乘月託宵夢。因之寄金微」とあり、此れその意に本づきて之を翻用したるなり。傳に云ふ、張仲素の詩、宮商の和諧せる、古人の未だ慮る能はざるものありと、以上の四絶又その一斑を見る、原集この題猶ほ一首あり、
秋天一夜靜無雲。斷續鴻聲到曉聞。欲寄征人問消息。

又、秋夜曲、
丁丁漏水管。夜何長。
征衣未寄莫飛霜。
漫漫輕雲露月光。
秋逼暗蟲通夕響。
俱に宛轉淒楚の致を極む、此れ唐絶の擅勝にして、宋以後の詩人、刻意に之を學んで終に似ることを得る能はざる所なり。

郡中即事

紅衣落盡暗香殘。
越女含情已無限。

羊士諤

葉上秋光白露寒。
莫教長袖倚闌干。

紅衣は藕花なり、庾信の詩に「蓮浦落紅衣」(入影)とあり、藕花落盡して殘香暗澹、葉上點點たる白露、已に秋光の多きを見る、節物の遷移し易きに感じては、越女の胸中已に無限の情思を含む、若し欄に倚つて一たび藕花の零落此の如きを見れば、寧ろ凄然として自ら悲しまざらんや、故に曰はく「莫教長袖倚闌干」。

登樓

槐柳蕭疎繞郡城。
秋風南陌無車馬。

夜添山雨作江聲。
獨上高樓故國情。

槐葉柳葉蕭蕭として下り、山雨之に加はりて颯然として江河の水聲の如し、秋風搖落の狀寫し得て極めて

工、門に車馬の來り問ふなく、獨り高樓に上りて故國を悵眺す、この情亦復た何ぞ限らんや。羊士諤、王叔文に黨せず、その忌嫉を受け、汀州寧化の尉に貶す、元和の初、擢んで監察御史と爲るも、又事を以て資州の刺史に左遷せらる、二詩殆ど是れ資州に在る時の作、前詩は情を越女に託し、この詩は直ちに胸臆を抒ぶ、而してその感愴する所は正に相同じ。

酬浩初上人欲登仙人山見貽

柳宗元

珠樹玲瓏隔翠微。
仙山不屬分符客。

病來方外事多違。
一任凌空錫杖飛。

仙人山は柳州に在り、柳正に此地に刺史たり、詩意に據れば、蓋し浩初上人詩を柳に寄せて同登を試みんとす、柳、病を以て之を謝す、因つてこの酬答あるなり、「珠樹玲瓏」問はずして是れ仙人山なるを知る、一「隔」字即ち阻游の張本、その意恰も我が凡人の宜しく登攀すべき所に非ずと云ふが如し、是を以て方外の邀約ありと雖も、身、正に病に臥し追隨すること能はざるなり、三四この意を申して上人に歸重す、「分符客」は柳自ら謂ふ、謫宦と雖も亦王命を以てこの地に守たり、故に「分符」と謂ふ、刺史、一州の主たりと雖も、仙人山は則ち得て管領する所に非ず、この故に上人の獨游に一任すとなり。凌空の錫杖は梁の高僧寶誌の事、杜甫の五言律、題玄武禪師屋壁の篇、「錫飛常近鶴」の句あり、即ちこの典なり、已にその下に細

注す。(上巻二百
四頁参照)

柳州が絶句已に、

破類山前碧玉流。

欲採蘋花不自由。

驢人遙駐木蘭舟。

春風無限瀟湘意。

を以て絶唱とし、幽妙微婉の域に詣れるものとす、本選録する所の一首、固より語意俱に臻れるものならず
るには非ず、但、彼を以て此に易ふ、未だ嗜痴たるを免れざるのみ。

題延平劍潭

想像精靈欲見難。

空餘千載凌霜色。

通津一去水漫漫。

長與澄潭白日寒。

歐陽詹

延平の劍潭は即ち晉の雷煥が豐城獄底に得る所の二劍、水に墮ちて龍と化し去るの處、此れその地を過ぎ
て之を題す、精靈は即ち化龍の寶劍を謂ふなり、一水漫漫として劍は則ち見るべからず、然れども澄潭の寒
光、長く白日に映じ、宛も凌霜の劍氣の如し、故に千載の下此を過ぎて當日の事を想像するに餘りありと言
ふなり。唐仲言以爲らく、空しく凌霜の色ありて潭水と寒を争ふも、終に世に補なし、豈に詹世に用ひられ
ずして自らその才を惜しむ歟と、その義を深曲に求めて附會に陥るを知らず、固より取るに足るなし。

歐陽詹も亦韓門の諸生、嘗て太原に薄遊し、因つて悦ぶ所あり、情甚だ相得たり、別るるに臨んで詹に「高
城已不見。況復城中人。」の句あり、後、妓、讎讎以て死し、一詩を留めて詹に示す、詹之を聞みし一慟して
卒す、是れその人本と情に痴なるもの、その友孟簡その事を述べ、五言詩を試して之を紀す、詩甚だ長し、
今收録に及ばず、按ずるに厲樊榭(男)その姫朱月上を哭するの詩、「朱欄今已朽。何況倚欄
人。」(此詩は樊榭山房續集卷二に「湖樓題壁」と)。袁子才(枚)曾て之を擊賞す、知らず實に歐陽詹の詩に本づくことを。
(校訂書云、隋書詩話卷十三、哭月上詩を載するも、
此詩を載せず。恐らくは樊榭の失考ならん。)

詹又、玩月の詩を以て名を得たり。詹は閩の泉州の人、地に高蓋山あり、又、詩山と名づく、その下に詩
村あり、詹が題詩の處なるを以てなり、詩山詩村の名殊に奇。

聞白樂天左降江州司馬

元稹

殘燈無焰影幢幢。

垂死病中驚坐起。

此夕聞君謫九江。

暗風吹雨入寒牕。

元微之の白樂天に於ける、その唱和に就いて之を見れば愛慕の情、金石を欺くべく、千里の神交、合符の如く
然り、その實渠が輕浮の性成、全く只附驥を一時に傍俸す、乃ち千載の下猶ほ元・白並稱し瑾(公瑾即)亮(孔明)齊
名の觀あるは渠が點智能く香山居士を一手に籠絡し、又且つ自らこの人と相終始して始めて自家立脚の地を
爲すに足るを一眼に觴定したるに由る、その自ら知るに於て實に離婁の明あるものと謂はざるべからず。然

れども樂天の長恨歌が今に至つて猶ほ如何に人口に膾炙せられ、而して微之の連昌宮詞が人をしてその一章一句を擧げしめんと欲して終に能はざるものあるに視れば、微之たるもの、大概亦以て窺ひ見るべし、他なし、渠は實に眞情摯思の以て人を動かすに足るものなかりしなり。その崔鶯に辜負せるの結果(會真記)、最愛の妻辜氏を失うて、終に巫山を除却すれば是れ雲ならざるの歎ある(五首)、豈に免るべからざるの數に非ずや。今その詩を評せんとするに當つて、渠が昧心失行の一を擧げて之が定案を下すは、稍、苛酷に似たりと雖も、余雅と甚だ微之の人と爲りを喜ばず、且つ前人この詩に於ける亦多く異辭あり(二百九十頁參照)、故に言の此に到るを覺えざるのみ。

殘燈焰なく景光慘然、君の遷謫を聞いて蹶然として起坐し、殆ど垂死の病中たるを忘る。白樂天この詩を看て云はく、この語他人尙ほ聞くべからず、況や僕をやと(與元微之書)。宋の洪邁も亦云ふ、嬉笑の怒は裂眦よりも甚だしく、長歌の悲は慟哭に過ぐと(萬首)、此れその情甚だ摯に似たるものあり、然れども子細に咀嚼すれば苦語甚だ過ぎて終に蹙蹙の聲を爲す、斷じて自然に肺腑より流露し出し來りたるものに非ず、善讀のものは毫厘分寸の間に於て、その性情の眞偽を鑒別する決して難からざるを信ず。

胡渭州

張祐

亭亭孤月照行舟。
 鄉國不知何處是。

寂寂長江萬里流。
 雲山漫漫使人愁。

張祐が樂府一時に風行し、禁中も亦之を唱ふるに到る、令孤楚の知を受くと雖も旋、元微之の忌嫉に遭ひ、偃蹇して以て終ふ、微之の言に云はく、張祐は雕蟲の小巧、壯夫爲さず、若し獎激太だ過ぎば恐らくは天子の風教を變ぜんと(唐詩紀事卷五十二)、然れども微之が爲す所、果して雕蟲の小巧に非ざるや否や。故に辛文房云はく、衛の蓮伯玉獨り君子と爲ることを耻づ、令孤公はこれに近し、元稹は則ち然らず、十譽足らず、一毀餘あり、その事業の淺深、此に於て以てその人を觀るべし、賢を忌み、能を嫉み、迎戸して噓し、己れを略して人を過むるものは穿窬の行なり、祐は能く處士を以て自らその身を終ふ、聲華鍾鼎を借らずして當代に高視し、今に至つて之を稱す、不遇は天なり、不泯も亦天なり、豈に彼れが取容阿附して遺臭の已まざるものに比せんやと(唐詩)、是れ有激の言と雖も、亦公論なり。祐已に放浪し、詩を爲りて自ら悼む、賀知章口徒勞説。孟浩然身更不疑(州判郎中)の句あり、然れども交する所のはみな當時の英傑、樂天の如きも常に之と往來し、杜牧も亦「何人得似張公子。千首詩輕萬戶侯」の贈あり、微之が猜嫉、百方之を掩はんと欲すと雖も、能く爲すことなきを知るなり。

祐已に樂府を以て名あり、胡渭州も亦樂府商調の曲、この曲調を以てこの詩を歌ふ、故に指して題目とす、初め詩義に關なし、此れは是れ樂府の常例に屬す、この詩述ぶる所は羈旅悵別の情、その詞甚だ崔顥が黃鶴樓の末句に類し、襲取する所あるが如し、祐が詩中に在つては、殊に至れるものに非ず、唐仲言曰はく、于鱗之を採る、一笑と稱するに足ると、その言や好し、然れども于鱗の失は固より獨り此に止まらず、故に唐も亦未だ偶、その一を昇してその萬を漏らすの譏を辭すること能はず。

雨淋鈴

雨淋鈴 夜却歸秦。
猶是張徽一曲新。
長說上皇垂淚教。
月明南內更無人。

玄宗蜀に幸し、陝斜谷に入る、時に霖雨旬に彌り、棧道中に於て、鈴聲の山と相應ずるを聞く、帝既に貴妃を悼み、因つてその聲を採りて雨淋鈴の曲を爲り、以て恨を寄す、時に梨園の樂工張徽と云ふもの、善く羯鼓を吹き、扈從して蜀に至る、帝その曲を以て之に授く、至德中、駕長安に還るに及んで、復た華清宮に幸す、從官嬪御みな舊人に非ず、帝因つて望京樓に於て張徽を召し出し、この曲を奏せしめ、覺えず凄愴流涕す、事は明皇別録に見ゆ、則ち祐がこの詩詠する所の本事たり。詩は解説を須たず、情韻雙絶し、千古この詩を讀むものは亦猶ほ明皇がこの曲を聴く時の如く、未だ凄愴として流涕せざるものはあらず、南内は興慶宮、即ち明皇が還京後の居る處、「却歸秦」はその還幸を謂ふなり。

祐がこの詩、その一聲の河滿子と俱に、幽悽婉麗、洵に絶調と稱す、孟才人をして一慟乃ち絶せしむるも亦宜なり(二百五十頁參照)。才人既に殞す、武宗醫をして之を候せしむ、曰はく、脈は尙ほ温かなるも腸は已に絶すと。既にして帝も亦崩す、極重うして擧ぐべからず、或は曰はく、才人を俟つに非ずやと、爰にその櫬を命ず、櫬至つて極乃ち擧がれり。後祐、孟才人歎を作る、その序に云ふ、才人は誠を以て死し、上は誠を以て命ず、

古の義激と雖も以て過ぎたるなきなりと、歌に云はく、「偶因歌態詠嬌癭。傳誦宮中十二春。却爲一聲河滿子。下泉須弔舊才人。」

號夫人 承主恩。 平明騎馬入宮門。

却嫌脂粉汚顔色。 淡掃蛾眉朝至尊。

楊貴妃の姉三人、みな才色あり、玄宗常に之を呼んで姨と爲し、宮掖に出入し、並に恩澤を承け、韓・號・秦の三國夫人に封ぜらる、その兄楊國忠、亦從遊縱慾、時に雄狐綏綏の諂あり。號國夫人尤も放誕を以て聞ゆ、常に聰馬に乗じて禁に入り、又、容光殊麗、朱粉を施さず、多く素面にして朝天す、此れ直ちにその事を詠じて之を歌樂に播したるなり。この詩或は杜少陵の集中に入る、是を以て論難紛紛、或は義を諷刺に取り、或は譏を輕薄に致す、沈歸愚が如きは之を國惡暴揚の列に置き、盛んに指撃を加へたり、平心之を論ずれば、若し以て杜の詩なりとせんには、直ちに當時の事を指斥す、多少諷意を帶ぶるもの、如く、又已に諷意を帶んで之を觀ば輕薄の責も亦或は道ること能はず、然れども定めて祐が作とせんには、斷じて既往を追諷するの必要あるなし、已に諷意なくんば詩固より淺露なるも、未だ之を謂つて輕薄なりと爲すことを得ず、且つ祐が樂府多く開元天寶間の遺事を讀す、「雨淋鈴」「寧哥來」の諸曲以て證とすべし、何ぞ彼れみ

な諷刺無うして、此れ獨り輕薄を以て斥せらるゝや。祐曾て崔涯と友たり、涯、性放恣自ら檢束せず、或は北里に乗興し、詩を倡肆に題す、之を譽むれば則ち聲價頓に増し、之を毀れば則ち車馬迹を掃ふ、祐の吟詠、時に或は之と俱にす、故に陸龜蒙に輕薄の詠、合譟してその才を譽むと見えたり、然れども此れ祐が病と爲すに足らざるなり。祐初め廣陵を過ぎて詩あり云はく、

十里長街市井連。月明橋上看神仙。人生只合揚州死。

後、果してその地に卒す。「寧哥來」の詩今、便宜を以て左に録す。

日映宮城霧半開。太真簾下畏人猜。黃播綽指向西樹。

不信寧哥回馬來。宮詞の體、自ら此の如くなるべし、亦深意あるに非ず。

度桑乾

客舍并州已十霜。無端更渡桑乾水。

歸心日夜憶咸陽。卻望并州是故鄉。

賈島

并州は朔方に接す、而して桑乾は并州の北更に二百里の外に在り、咸陽は秦都、即ち長安なり、この詩久

しく他郷に客たるもの、人人みな言はんと欲する所の情狀にして、これより前き實に未だ道破を経ず、又、一たび道破を経て此より後再び着語すべきものなり。謝疊山の解に曰はく、人客の郷を思ふは、人の常情なり、旅寓十年、交遊歡愛故郷と殊なることなし、豈に能く依依眷戀の懐なからんや、桑乾を渡りて并州を望み、反つて以て故郷と爲す、此れ亦人の至情なり、東西南北の人に非ずんばこれを道ふ能はずと。是れ専ら字句に就いて之を註釋す、その一部の意を得ざるには非ず、而かも餘情甚だ少し、是を以て明の王敬美(世)之を駁して曰はく、此れ賈島自ら郷を思ふの作、何ぞ曾て并州と情あらんや、その意久しく并州に客として遠く故郷に隔たりたるを恨む、今は惟に歸る能はざるのみならず、反つて北、桑乾を渡る、還た并州を望めば宛然たる一故郷の如し、并州も且つ住することを得ず、何ぞ況や、咸陽に歸ることを得んや、此れ島が意なりと。按ずるにこの説重きを思郷に歸す、極めて味あり、然れども落句明らかに「并州是故郷」と云ふ、未だ并州に於て全く情分なきものと謂ふべからざるなり。沈德潛、王を右として謝を非なりとす、余故に兩説を並舉すと云ふ。

成德樂

趙女乘春上畫樓。無端更唱關山曲。

一聲歌發滿城秋。不是征人亦淚流。

王表

成德樂も亦樂府調の名、この調を以てこの詩を歌ふのみ、本篇の本题に非ず、唐樂のこの種、即ち後來、宋詞元曲の牌名と同例に屬す、實にその濫觴を開けるものなり、乘春の歌ふ所にしてその聲滿城の秋を做す、悲婉知るべし、更に關山を唱ふ、尤も征人の感懐に切、即ち征人ならざるも亦涙流る矣。その用筆蓋し戴叔倫が「孤猿更叫秋風裏。不是愁人亦斷腸。」(夜發袁江寄李)に本づく、後來做ふもの甚だ多く、今に至つて殆ど厭套を爲せり、但、近清の趙鳳北揚州觀劇の詩、「今古茫茫一邱。恩讎事已隔千秋。不知於我于何事。聽到傷心也淚流。」(鳳北詩鈔)。同一意味の語にして、之を觀劇に應用す、則ち頗る斬新なるを覺ゆるのみ。

漢宮詞

青雀西飛竟未回。
侍臣最有相如渴。

君王長在集靈臺。
不賜金莖露一盃。

李商隱

李義山は沈博絶麗の才を以て晚唐に冠絶す、王荊公以て善く老杜を學ぶものとす、知言と謂ふべし、但、その生や晩く、目已に開元天寶の盛を觀ること能はず、又、安史の禍亂中原を覆没し、激昂悲壯、以てその忠忱を表明するの機に遭ふこと能はず、只、庸主上に在りて、宦寺權を専らにし、朝臣黨を結んで、私人是れ用ふるの日に當り、當塗に阨塞し、記室に沈淪す、顯言するときは、即ち禍殆ど測られず、是を以てその指

を紆曲にしその詞を護謾にし、聊か借つて以て鬱紆の懐を述ぶ、少陵の危詞切直なると相背馳する如きは、誠にその時と遇との然らざるを得ざるに坐するのみ、若しその初め令孤楚の信任を受け、楚の卒するに及んで王茂元が愛才の殷なるに感じ、之と結婚するに至つて、深く楚の子綯の銜む所と爲り、終に排陥に罹りて一生を轆轤に沒了したるは、適、以て義山が心に公平を持し、黨局に附麗する所なくして、肯へて身を傾軋の渦旋中に投ぜざるの苦衷を見る、斷として首鼠兩端、忘恩背義の實あるに非ず、史家の論斷、乃ち此を以て放利、偷合、諛薄、行なきものとす、豈に不白の冤枉に非ずや。特に此のみならず、義山が詞藻の華瞻なる、時に玉臺金樓の體に似たるものあるを以て、遽かに目して才人浪子と爲し、その感時傷事の頗る風人の旨を得たること、實に曲江の杜甫と冥合するものあるを喻らず、今に至つて人、綺羅脂粉の詞を視れば、則ち謂つて温・李の體とす、眞に痛恨すべし。若し宋の楊億・劉子儀等が西崑の唱酬、徒らに刻鵠を事とし、字句を雕飾し、公然自ら命じて義山を學ぶと謂ふに至つては、此れ則ち義山の罪人のみ、知らざるもの、或は崑體を以て義山を議す、是れ又、眼ありて盲に同じきものなり。

唐の憲宗、方士の術を喜び、金丹を服して暴崩す、その後穆宗・武宗復たその轍を蹈む、義山がこの詩を作る、實に武宗の朝に在り、而して史に據るに武宗亦曾て望仙臺を苑中に築く、「君王長在集靈臺」の句隱指する所尤も切なり。漢武故事に云はく、武帝七月七日承華殿に潔齋す、忽ち青鳥あり西より來る、東方朔曰はく、此れ西王母の將に來り下らんとするなりと、頃くありて王母果して至る、今云ふ「青雀西飛竟未回」と、即ち是れ一去して復た來らざるなり、然り而して君王は長く臺上に在り、求むる所果して何事ぞや、集靈は武帝の宮の名、承露の金莖、亦是れ武帝の作る所、而して司馬相如は常に消渴を患ふ、若し「長在靈

臺」の君王にして果して能くその求むる所を得たらんには、金莖一盃の露を惠賜して、以て侍臣が相如の渴あるものを醫する、亦何ぞ難からんや、今その事なきより之を觀れば、君王實に未だその求むる所を得る能はざるなり、天子にして猶ほ且つその願を遂げず、況や相如の渴をや。義山毎に相如を以て自ら比す、下文「茂陵秋雨病相如」亦同じ、明らかに自己が發跡の期なき一に天子の求仙の茫漠たるに等しきを慨するなり。前人この詩を解する、或は求仙の益なきを諷するものとし、或は恩の下に逮ばざるを議るものとす、然れども、この詩本と筆筆折轉し、警動非常にして、之を出すに深婉を以てす、獨り神仙を好めるを言ふのみならず、又、獨り賢臣を恤まざるを言ふのみならず、兩意融合して、終に自慨に歸す、是れ用意の最も曲なる所以なり、若しその一端を採りて盛んに稱道を加へば、則ち未だ與に義山の詩を語るに能はず。

夜雨寄北

君問歸期未有期。
何當共剪西窗燭。

巴山夜雨漲秋池。
卻話巴山夜雨時。

此れ義山巴蜀に在りてその内人(妻)に寄するの作、北と云ふものはその妻長安に在るを以て、巴山よりして之を北するなり、或は北を改めて内に作る、洪邁が萬首絶句の如きあり、然れども義山集中寄内の詩極めて多くして、みな明らかに標題せず、故に仍ほ寄北に作るを是と爲す、又或は此を以て私匿の人に寄するもの

とせる、唐仲言が唐詩解の如きあり、然れどもこの詩語淺く意濃やかなり、極めて寄内の情思に協ふ、若し以て他の所歌(題)とせば、その語大いに似ざるものあり、故に此も亦的解に非ず。

全篇の結構は蓋し賈島が「客舍并州已十霜」の一篇より垂胎して成る、彼の一絶尤も當時に傳誦したるを以て、義山實に意ありてその體に模せしなり、家信頻りに來りて我が歸期を問ふと雖も、期は固より知るべからずして、夜雨秋池に滂沱たり、孤枕單被凄凉の情境、之を言外に寓す、因つて一步を探過して收と爲す、言ふ、凄凉耐へ難しと雖も、いつか當に君と西窗燭下に團樂して、今日の愁況を寢物語とするの日あるべしとなり。身、悲に居つて歌を以て悲を話せんと欲す、斡旋の妙水精の如意を弄し白玉の連環を解するが如き觀あり。紀曉嵐(考)曰はく、不盡の語を作すには、毎に做作の態あるを免れず、この詩含蓄露はれず、却つて唯、一氣に説完するに似たり、故に高唱たりと。姚平山曰はく「料得閨中夜深坐。多應説着遠行人。」是れ魂飛んで家裡に到り去る、この詩は則ち又預め飛んで家に歸るの後に到るなり、奇絶と謂ふべしと。その評隲大いに當れり。

寄令狐郎中

嵩雲秦樹久離居。
休問梁園舊賓客。

雙鯉迢迢一紙書。
茂陵秋雨病相如。

令狐郎中は令狐綯なり、傳に稱す、王茂元、河陽を鎮し義山を辟して掌書記と爲し、又、その才を愛し女を以て之に妻はす、茂元は讀書儒たりと雖も、然れども本と將家の子、李德裕素と之を厚遇す、時に德裕政を乗り、用ひて河陽の帥と爲す、德裕は李宗閔・楊嗣復・令狐楚等と大いに相讐怨す、義山既に茂元の從事と爲る、宗閔の黨大いに之を薄しとす、時に令狐楚已に卒し、子綯、員外郎と爲る、義山を目して背恩とし、尤もその行なきを惡むと、この詩嵩雲を以て自ら言ひ、令狐の居る所を指して秦樹とし、又、梁園賓客を以て自ら況す、嵩嶽・梁園、俱に河陽の地に屬す、明らかに既に河陽の婚に就きて後、以て在京の令狐に寄するものたり。令狐已に義山を恨むこと次骨にして、この詩猶ほ細かに自家が纏綿宿往の情懷を述ぶ、意借つて以て自己が心跡の黨局中に遊移するものに非ざるを表白し、その交遇の舊の如くならんことを希ふもの、如し、その詞の甚だ悲なる、實に亦此を以て彼を動かさんと欲するに在るなり。

司馬相如、梁に遊んで梁孝王の賓客と爲り、のち、漢武の廷に事へて孝文園の令たりと雖も、此れ以て美官に非ず、既にして病免し、茂陵に家居し、渴を憂ひて卒す、僅かに身後に及び、楊得意の薦を以て、遺稿をその家に求め、封禪書一篇を得たり、武帝大いに擊賞を加ふ、姚平山曰はく、相如茂陵に病臥す、楊得意に非ざれば武帝に知らるゝに由なし、此れ楊得意を以て令狐に望むなりと、その一面の意義或は仍ほ此に在るべし、要するに通篇格韻俱に高し、一唱三歎に値すべきなり。

秋思

許渾

琪樹西風枕簟秋。
清歌一曲掩明鏡。

楚雲湘水憶同游。
昨日少年今白頭。

琪樹枕簟の夢、楚雲湘水の間を離れず、忽ち秋聲の颯然たるに驚き、轉た同游の再びし難きを憶ふ、是に於て清歌を發して自ら寛すと雖も、明鏡を掩うて反つて照らさんことを畏る、蓋し昨日の少年今は已に鬢然たり、俊游昨の如きも、何ぞ歲月の人を待たざる此の如きや。通篇悽幽幽麗、今に于て猶ほ丁卯の風格を想ひ見る。

渾、字は仲晦、丹陽の人、少うして苦學勞心し、清羸の疾あり、後、丁卯湘橋の村舎に退居し、作る所を綴録し、因つて以て篇に名づく、その調格、玉溪(李商隱)よりも弱くして飛卿よりも清し、後來慕ふもの極めて多く、人人此に由つて以て隴龍の照夜を得んことを希ふ、早歲嘗て天台に遊び、仰いて瀑布を看、旁ら赤城を眺む、方廣を非煙に辨じ、石橋を懸壁に躡み、登陟兼長にして幽勝を窮覽し、孫綽が古賦を朗誦して、傲然として思歸の想あり、既にして晝夢に山に登るに、宮闕の虚を凌げるあり、一佳人箋を出して詩を求む、未だ成らずして夢破れたり、後、吟じて曰はく、

曉入瑤臺露氣清。
庭中惟見許飛瓊。
鹿心未斷俗緣在。
十里下山空月明。

明日復た夢に山中に至る、佳人曰はく、子何ぞ余が姓名を人間に題せるやと、遂に改めて「天風吹」

下歩虚聲くたしきよせいじやうに作りしと云ふ。孟榮が本事詩、託して美談と爲す、未だ遽かに信ずべからざるも、丁卯の清思秀骨、自ら爾許の小説を傳誦せらるゝに足るものあるを知るなり。

江樓書感

趙嘏

獨上高樓思渺然。

月光如水水連天。

同來玩月人何處。

風景依稀似去年。

趙嘏、字は承祐、山陽の人、詩を爲る瞻美にして興味多し、杜樊川その早秋の詩「長笛一聲人倚樓」の句を愛し、吟歎して已まず、人因つて目して趙倚樓と爲す、性、豪邁爽達にして多く卿相に款接し、館閣に出入し親屬の如く然り、能く書生を以て遠近をして知重せしむ、所謂一日にして名は京師を動かし、三日にして天下に傳滿せしむるの概あり、然れども一尉に偃蹇してその官終に達せず、宣宗本とその名を知り、因つて宰相に問ふ、趙嘏は詩人なり、曾て好官と爲れりや否やと、命じてその詩を進めしむ、開卷に秦を詠ずるの詩あり、云ふ「徒知六國隨斤斧。莫有群儒定是非。帝覺悅ばず、事竟に寝む。又曾て「早晩相酬身事了。水邊歸去一閑人」の句あり、人此を以て仕塗に乾元たるの識と爲すと云ふ。本篇江樓書感、物是にして人非なるの歎を寫す、「渺然」の二字全篇を牢蓋し、月光水光、風景依稀、眼に映じ懐に觸るゝもの寫し到らざる所なし、「獨上」「同來」虚字を以て關鎖す、

尤も神韻天然なるを覺ゆ。嘏浙西に居るとき一姫を愛寵す、その京に上るに及んで、留めて母に侍せしむ、偶、浙に帥たるもの、窺ふ所と爲り、奪ひ歸る、明年嘏及第し、自ら傷んで詩を賦して曰はく、
寂寞堂前日又曛。陽臺去作不歸雲。當時聞說沙吒利。今日青蛾屬使君。
蓋し韓翃とその恨を同じうす、帥、之を聞いて意殊に慘然、乃ち人をして姫を長安に送り回さしむ、時に嘏方に關を出て、途次横水驛に到り、忽ち馬上に於て相遇ふ、姫因つて嘏を抱いて痛哭し、信宿にして卒す、嘏終身思慕已まずと云ふ、この詩同來玩月の痛、豈に復た姫のために發せる也歟。

楊柳枝

溫庭筠

館娃宮外艸城西。

遠映征帆近拂堤。

繫得王孫歸意切。

不關春草綠萋萋。

溫庭筠は才華韶秀、詞致穠麗、誠に亦是れ一時の選、是を以て千古玉溪生(李商隱)と名を齊しうし謂つて温・李と爲す、亦猶ほ六朝の時庾信・徐陵の並稱せられたるが如し、庾信の文章、老いて而して更に成る(絶句「戲作六」)豈に徐孝穆(陳)の徒らに玉臺の豔を眇するの比ならん、玉溪の纏綿悽楚、固より多く江關の蕭瑟に譲らず、則ち温が才藻、未だ遽かに蘭成を望む能はざるも、亦何ぞ孝穆と比肩し難からんや。少うして敏悟にして天

才あり、場屋に入り、八叉手にして八韻を成す、又善く琴を鼓し笛を吹く、絃あれば即ち彈じ、孔あれば即ち吹く、囊桐と柯竹とを擇ぶことなし、詩賦已に綺麗にして、尤も側詞尖曲に長ず、宣宗曾て善薩蠻の詞を愛唱す、令狐綯その旨を窺ひ、竊かに飛卿をして數曲を代作せしめて之を進む、綯堅くその代作たるを泄すべからざるを戒めて、飛卿毫も意に介せず、醉後遽かに之を人に言ふ、此を以て綯の衞む所と爲る、綯又、一故事を以てその出處を温に問ふ、對へて曰はく、事は南華に出てたり、南華は僻書に非ざるなり、冀はくは相公變理の暇、時に古書を瀏覽せられんことをと、綯益々怒り、終にその才あり行なくして詭薄狎邪の流に過ぎざるを奏す、温曾て「中書省内坐將軍」の句あり、蓋し綯の無學を譏るなり。宣宗頗る微行を好む、温、龍顔を識らず、跡不敬に渉る、是を以て方城の尉に謫せられ坎墮して身を終ふ。顧ふに令狐綯、執務の資を以て、朋比して奸を成し、少しく己れが意に適せざるものあれば、直ちに輕薄を以て之を目し、百方醜辱す、是れ所謂豕を抱いてその臭を忘るゝもの、その輕薄更に甚だしきものあり、後人之を察せず、動もすれば綯が排陷の言を以て温・李の定評と爲さんと欲す、寃と謂はざるけんや。若し温が樂府の芊綿綺合なるものに至つては、玉溪と雖も時に或は一着を輸す、況や其他をや、温の詩亦何ぞ之を讀まざる可けん。

楊柳枝八首、蓋し劉・白に續いて作るもの、この章は則ち亡國遺墟の楊柳に就き、無限悽惋の意を寓し、三四又楚辭の語を翻用し、春草を襪貼して以て柳絲の恨を惹く更に長きを形す。「王孫游兮不歸。春草生兮萋萋。」此れ即ち楚辭の原句（淮南王安の「招隱士」）、人の多く傳誦する所、離燕に王孫草の名あるも、亦その一名を當歸と稱するに依り、楚辭の句意に關合せしめたるなり。館娃宮は吳の夫差の宮苑、鄴城は魏の曹操が臺觀、みな是れ亡國の墟なり、遠きものは征帆に映じ、近きは横堤を拂ふ、望む所として是れ楊柳ならざるは無きなり、則ちその千條萬縷、披拂鼻窺せる、以て王孫が歸意を繋ぐに足る、必ずしも綠草の萋萋たるを待つて始めて然らざるものあり、所謂翻用なり。その意猶ほ惟、柳以て銷魂するに足ると謂ふが如し、同一萋萋の色を以て妙に相映帶す、措詞尤も工なり。この外、

宜春苑外最長條。閒鼻春風伴舞腰。正是玉人腸斷處。

南內墻東御路旁。預知春色柳絲黃。杏花未肯無情思。

金縷毵毵碧瓦溝。六宮眉黛惹春愁。曉來更帶龍池雨。

半拂闌干半入樓。御柳如絲映九重。鳳凰窗柱繡芙蓉。

その性情の貞淫と氣格の高卑とは姑く之を置く、只、修詞上の工夫と風調の婉約たるに於ては、劉・白に比して斷として幾分の進歩を見る、是れ獨り飛卿が本色たるのみならず、晚唐の詩を玩味せんと欲するものはみなこの意を帶んで看んと要す。

折楊柳

枝交影鎖長門。

嫩色曾霑雨露恩。

段成式

鳳輦不來春欲暮。

空留鶯語到黃昏。

段成式、字は柯古、段文昌の子、文昌は即ち韓碑を毀して後更に勅命を奉じて平淮西の碑文を草せしものなり、家に奇篇、秘籍多く、成式因つて而して盡く之を窺ひ、博覽強記を以て名あり、當時の學者、旁ら能く佛典に通ずるものは、實に成式の右に出でたるものなし、著はす所の西陽雜俎は、今に至るまで、唐時説部の冠として藝林に寶愛せらる、その詩李義山・溫飛卿と唱和して漢上題襟集あり、三人なるもの排行みな第十六、時に三十六體と稱す、その風格以て概見すべし。折楊柳は樂府鼓角橫吹曲辭の一、本と以て離別の悲緒を歌ふ、今借つて失寵の宮人の詞と爲す、古題を翻して別に新意を出せるものなり。長門の柳、跪地にして垂る、昔又、嘗て雨露の恩に霑ふことを得たり、今は則ち鳳輦來らず、春も亦暮れんと欲す、空しく枝上の鶯語を留めて、延して黃昏に到るのみ、容光已に衰へて老の將に至らんとするを悲しむ、蓋し託して以て才人遲暮の歎を見るなり。

宮怨

司馬禮

柳色參差掩畫樓。

曉鶯啼送滿宮愁。

年年花落無人見。

空逐春泉出御溝。

この詩も亦宮闈怨嘆の想を寫す、「曉鶯啼送滿宮愁」則ち長門の悲を抱くもの止、に一人のみならざるなり、花開き花落つ、顔色空しく好きも、人の之を見るなし、將た誰れを適としてか容を爲さんや、流水花片

を浮べ去つて御溝を出づるも、人は則ち再び人間に出づるの望なし、唯、魂夢の空しく之を逐ふあるのみ、後宮多麗にして恩幸及ぶことなく、この種の恨を抱くもの、古今何ぞ限らん、是れ唐の太宗が宮女を放出して史傳へて盛徳と爲す所以なり。

胡震亨が云はく、司馬札は字里詳かならず、宣宗の大中の時の人、唐宋志俱に考なし、文獻通考に其集一卷を載せ、稱して先輩とす、溫飛卿が集にもその及第に寄する詩あり、品彙司馬禮に作るは誤ると、此れに據れば本選も亦品彙の誤を襲ふ、自ら當に札に作るを是とすべし。

宴邊將

張喬

一曲涼州金石清。

邊風蕭颯動江城。

坐中有老沙場客。

橫笛休吹塞上聲。

邊將を宴して涼州を奏す、韻金石の清澈に比すと雖も、邊風忽ち起つて大いに情を爲し難し、況や座に久しく沙場に老いたるの客あるをや、若し更に塞上の悲聲を聞かば、賜將に斷絶して自ら堪ふる能はざらんとす、故に橫笛を吹くを休めよと言ふなり、戰亂相次いで民みな兵を厭ふ、自ら衰世の氣象を見る、詩の國運に關する亦妙少に非ず。

張喬は九華の隱士、十年園を窺はずして以て苦學す、詩句清雅にして、迥かにその倫少し、許棠・喻坦之。

劇燕・吳罕・任濤・周繇・張曠・鄭谷・李栖遠と齊名して時に十哲と稱し、俱に聲律を以て、聲を昭宗の大順中に馳す、則ちその人已に五代に入る、詩に唯殺の氣あるは免れざる所なるを知るべし。

退朝望終南山

李拯

紫宸朝罷綴鸞鸞。丹鳳樓前駐馬看。
唯 有 終 南 山 色 在。晴 明 依 舊 滿 長 安。

黃巢の亂、唐室の危、綴旒の如し、李拯は隴西の人、僖宗に事へて知制誥に累官す、既にして長安再び亂れ、帝、寶籙に潛幸す、扈從及ばず、朱全忠篡位して逼つて翰林學士と爲す、拯、心自ら安んぜず、嘗て退朝して馬を國門に駐め、終南山を望んでこの詩を吟じ、吟じ已んで涕下ると云ふ、即ちその意亂後の風景全く非にして、存する所のものは只、終南山色のみと言ふに在り。その紫宸鸞鸞、丹鳳樓前の語、字は壯麗なりと雖も、實は杜少陵が「王侯第宅皆新主。文武衣冠異昔時。」(興)と同痛を抱く、出すに蘊藉を以てせるは是れ絶句の本色たるが故なり。後、朱全忠敗れて、拯、亂兵の殺す所と爲り、詩稿散佚して、存する所は惟、この一首、亦悲しむべからずや。その妻盧氏亦詩を知り文を能くし、姿色あり、賊脅すに双を以てして汚されず、一臂を斷じて死す、人多く之を傷む。

華清宮

崔魯

草 遮 回 蹬 絕 鳴 鑾。
明 月 自 來 還 自 去。
雲 樹 深 深 碧 殿 寒。
更 無 人 倚 玉 闌 干。

崔魯も亦是れ僖宗廣明間の進士、悠悠たる亂世、終に成る所無く、唯、詩を以て自ら遣る、殊に狀景・詠物に善く、之を讀むに氷雪を嚙むが如く、心爽に神怡す、この詩空宮寂寞の景を寫す、結句暗に明皇・貴妃の事に關照す、尤も幽婉たり、傳に稱す、崔、深く杜樊川を慕ひ、風範約略之に近しと、本篇を見て亦その虚語に非ざるを知る。但、于鱗、晚唐に於て獨り樊川を斥してその一章をも收録せず、乃ち反つてこの種を採る、未だその細を録してその大を遺れたるを免れざるのみ。

古別離

韋莊

晴 煙 漠 漠 柳 毵 毵。
更 把 玉 鞭 雲 外 指。
不 那 離 情 酒 半 酣。
斷 腸 春 色 在 江 南。

韋莊は即ち五代の雋絶なるもの、詩已に婉麗にして又、填詞に長じ、終に北宋の風氣を開く、昭宗の乾寧九年に登第し、後、蜀王建に事へて、同平章事に到る、殆ど之を唐人と謂ふことを得ず。此れ煙柳に對して離情を生ず、首句の景語即ち所謂斷腸の春色なり、春色は長く江南に在りて、人は則ち玉鞭を擧げて雲外に去る、即ち離情のいかんともすべからざる所以なり、招恨多情、是れ詩詞の體未だ全く剖判せざるもの、故に時に相出入す、若し填して小令に入れば、亦黃絹幼婦たるを失せざるなり。

宮怨

李建勳

宮門長閉舞衣閒、
御羨落花春不管。

畧識君王鬢已斑、
御溝流得到人間。

意匠はほぼ司馬札が宮怨に似たり、但、彼れは猶ほ蘊蓄を主とす、此れは則ち君王の年老を嫌ふ、その思太だ淫、落花の拘管なきを羨む、その情更に蕩、六朝の浮哇と雖も未だこの已甚の詞あるを見ず、詩は固より道義を講ずるの具に非ずと雖も、亦斷として情に發し禮義に止まる、絶えて閑檢なき此の如きは、以て訓とすべからず。李建勳は南唐に仕へて宰相と爲り、師を臨川に出し、歸るに及んで累表して致仕し、自ら鍾山公と號す、その引決の意、豈に江南偏安の局の爲すべからざるを看破したるに由る歟、果して然らばこの詩實に亦借つて以てその志を見るものに似たり、跡は明哲の保身に似たるも、未だ甚だその君國に不忠なるを

免れず、于鱗の採つて選中に入るは、眞に偽體を別裁するの明なきものと謂ふべきなり。

徐獻忠曰はく、晩唐の諸子格調を選まず、専ら情景を事とす、建勳の詩每聯必ず景象を設く、工寫の極、自ら流れて俳と爲るを知らずと、則ち建勳たるもの知るべし、この詩の正則に協はざるを怪むこと莫きなり。

水調歌第一疊

張子容

平沙落日大荒西、
隴上明星高復低。
孤山幾處看烽火、
戰士連營候鼓鼙。

唐曲水調歌凡そ十一首、一首を以て一疊とす、前五疊を歌と爲し、後六疊を入破と爲す、大抵邊塞の悲と宮闈の怨とを寫す、多く作者を詳かにせず、その入破の第二疊、乃ち杜甫の「錦城絲管」の一篇を取りたるより推せば、多く開元天寶間名人の詩の時に流傳したるものを採收して以て一套の曲譜と爲せしのみ、于鱗定めて張容子と爲す、恐らくは杜撰に屬す。

大荒日落ちて只、隴上の明星高低滅明するを見る、沙漠の夜景眞に應に此の如きものあるべし、既にして孤山の一角、遙かに烽火の連に擧がるを望む、知るべし敵の將に來り近づかんとするを、是を以て連營の戰士、一齊に結束し、鼓鑿の一鳴を候つて即ち出て戦はんとす、唯、その狀を寫して、姿態躍然たり、奏するに雄壯の調を以てす、定めて人の神氣を軒昂せしむるに足るものあらん也。

涼州歌第二疊

朔風吹葉雁門秋。萬里煙塵昏戍樓。
征馬長思青海上。胡笳夜聽隴山頭。

涼州は西涼の都督郭知運が開元中の採進に係る(七百六十)の作者を詳かにせず、只、その第三疊「夜臺空寂」の一首は即ち是れ高適が詩なり。この詩亦邊塞の光景大約嘉州・之漢の諸人の調に似たり、その意亦習見する所、必ず疏釋せず、樂府の重んずる所は、その音律に在り句字の工否は初めより問ふ所に非ず。

水鼓子第一曲

雕弓白羽獵初回。薄夜牛羊復下來。
夢水河邊秋草合。黑山峰外陣雲開。

水鼓子も亦唐曲の一、教坊の傳播する所、郭茂倩の樂府詩集、伊州・梁州・水調・清平・渭城等と共に之を近代曲辭に收め、而して云ふ、此等概ね武德・貞觀に始まりて、開元・天寶に盛んなり、肅・代以降、亦因造あ

り、僖・昭の亂、典章亡缺す、その錄に著するものは、十四調二百五十三曲のみ、亦以てその概要を見るべしと。この詩言ふ、健兒獵し罷んで、牛羊復た下る、以て胡敵の隨つて破れば隨つて來り、勦滅の期なきに喩ふ、故に秋草は合すと雖も、陣雲は又開くなり。唐仲言以て邊境寧靜の狀を寫すとす、大いに非なり。

雜詩

無定河邊暮笛聲。赫連臺畔旅人情。
函關歸路千餘里。一夕秋風白髮生。

陳祐

此れ亦無名氏の作、定めて陳祐と爲すは何の據あるを知らず、陳祐その人字里更に考なし、以て準と爲すべからざるなり。無定河は延安府に在り、潰沙急流、深淺定まらざるが故に名づく、赫連臺は即ち晉時の夏王赫連勃勃の建つる所、笛聲暮に動いて、旅情殊に切、正に函關路遠くして、歸を思うて得ず、是を以て乍ち悲聲を聽いて、白髮の鬢に生ずるを覺えざるなり。淺語にして盡情す、風調尤も佳、五代の陳陶に「可憐無定河邊骨。猶是春閨夢裏人。」の句あり。大いに人口に播すと雖も、稍、作意あり、本篇に比して遜すること一等。

初過漢江

無名氏

襄陽好向峴亭看。
爲報習家多置酒。

人物蕭條屬歲闌。
夜來風雪過江寒。

襄陽に峴山あり、羊祜墮淚の碑の存する所、山簡曾て襄陽を鎮す、唯、酒是れ耽る、習氏の豪族あり、盛んに園池を治す、簡出て嬉遊する毎に、必ず池上に酔ひ、接籬を倒まにして歸る、後人之を達とし、往往吟詠に入る、李青蓮最も多し。この詩、人物蕭條、仍ほ墮淚の意を帶ぶ、歲闌風雪、獨り自ら江を渡る、因つて習家に酒を置いて迎へんことを屬す、蓋し山公の放曠を以て自ら居るなり、殆ど亦是れ謫仙人の語。

胡笳曲

月明星稀霜滿野。
漢家自失李將軍。

氈車夜宿陰山下。
單于公然來牧馬。

龍標が「若使龍城飛將在。不教胡馬度陰山。」と同意、出すに仄韻を以てす、音古に調健なり。「氈車夜宿」は即ち吹笳の處、南收駭駭、笳聲の愈々多きを致す、公然忌憚する所なきに至つて、邊境の事終に問ふべからず矣。何等の感慨ぞ。

塞上曲

紅顏歲歲老金微。
白草城中春不入。

沙磧年年臥鐵衣。
黃花戍上雁長飛。

王烈

四句全對、亦是れ一格、但、語に依傍多く、意も亦踏襲あり、特にその調の諧婉、仍ほ唐音を失せずと云ふ爾、金微黃花戍並に已に屢見す、春風入らず、朔雁長く飛ぶ、凄慘の景象冥想を爲すべし、王烈は大曆中の人、その傳未だ詳かならず。

又

孤城夕對戍樓閒。
明鏡不須生白髮。

回合青冥萬仞山。
風沙自解老紅顏。

亦王之渙が黄河遠上の篇に取る所あり、三四の意も亦多く習見す、斬新と云ふことを得ず。大典曰はく、閑の字に意あり、三四の句即ち閑中より一段の悲況を想出す、白髮を看ると曰はずして生と曰ふは、唐人用語

の蕙蕪なる所なりと、要するに于鱗の喜んでこの種を取るは、極めてその摸擬剽襲の宗派に吻合するものあるを以てのみ、明人の唐を學ぶ大率此の如し。

邊詞

張敬忠

五原春色舊來遲。二月垂楊未掛絲。正使長安花落時。即今河畔冰開日。

邊土節候の異なるを紀して以て苦寒の甚だしきを見る、起句春色遲の三字即ち一篇の綱領たるなり。張敬忠は開元中平盧の節度使と爲る、尤延之が全唐詩話に云はく、睿宗の先天中、王主敬侍御史たり、自ら才望華妙を以て當に省臺の前行に入るべしと思へり、忽ちにして膳部員外郎に除せらる、微に悵惋あり、時に張敬忠吏部郎中たり、戯れに詠じて曰はく「有意嫌兵部。專心望考功。誰知脚蹤蹤。」

幾落省牆東」と、蓋し膳部は省の最東北隅に在るが故なり、云云、その詩に關する行事、僅かに此に一見す。

九日宴

張謩

秋葉風吹黃颯颯。晴雲日照白鱗鱗。歸來得問茱萸女。今日登高醉幾人。

第一句風色凄慘、第二句秋天薄陰、登高の醜、轉た歡を成さずして罷むものゝ如し、故に歸來茱萸滿頭の女に逢うて、惟んで今日能く幾人の醉樂するものあるやを問ふなり。或は云ふ、作者蓋し高貴の宴に與ることを得ず、悵して此を賦するなりと、細かに「得」字を味はへば、此れ亦青紫に中れるに似たり、謩の字里世次並に考ふる所なし、今敢へて臆擬を加へず。

第二句雲日の形容頗る妙、呂氏春秋に「山雲草莽。水雲魚鱗。」の語あり、又、鮑照の詩に「鱗鱗夕雲起」(上海師範) 一白字を加ふ、尤も秋空に切なり。(都道中作)

西施石

樓穎

西施昔日浣紗津。石上青苔思殺人。一去姑蘇不復返。岸傍桃李爲誰春。

西施石は傳へて西施の倚つて以て浣紗するの所とす、石青苔に封ず、今は即ち人の倚るなし、西施は一た

び姑蘇に去つて、麀鹿を吳苑に棲ましめ、鴨夷を五湖に逐ふ、終に復た返らず、即ち今に至つて苧蘿の溪頭
夾岸の桃李、舊に依りて華豔なる、抑、誰が爲の春色ぞや、是れ石上に延佇してその人を思殺するに堪へざ
るの意なり。樓は天寶中の進士、官右武衛録事に到る。

和李秀才邊庭四時怨

盧弼

八月霜飛柳遍黃。
隴頭流水關山月。

蓬根吹斷雁南翔。
泣上龍堆望故鄉。

霜柳全く黄に、蓬雁俱に飛ぶ、景色已に凄厲、況や隴水關月、聲として物として、怨咽ならざるは無し、
安んぞ望郷一片の涙を灑がざるを得んや、曲名を借つて事物に綜合す、此れ亦是れ唐人一種の筆墨なり、已
に屢之を言ふ、故に肯へて贅せず。

又

朔風吹雪透刀瘢。
半夜火來知有敵。

飲馬長城窟更寒。
一時齊保賀蘭山。

邊庭四時怨凡そ四章、此れその秋冬を選す。雪刀瘢に透る、朔風刺すよりも利、城窟更に寒し、水骨を生
ぜんと欲す、馬に飲ましめんとするもその所なきを知る、時に于て烽火忽然敵兵來り襲ふ、賀蘭の險以て力
保せざるべからず、嚴寒酷烈の候、寧處するに違あらざる此の如し、天下の苦、寧ろ征人より甚だしきもの
ある乎。此れ水調歌第一疊と相似たり、彼れ壯此れ悲、各、勝處を擅にす、極めて諷誦に耐へたり。盧弼一
に盧汝弼に作る、晚唐より五季に渉るの人、その四時怨みな誦すべし。春に云はく、

春風昨夜到榆關。
朝朝應上望夫山。

故國煙花想已殘。
少婦不知歸未得。

夏に云はく、

盧龍塞外草初肥。
至今猶自著寒衣。

雁乳平蕪鷗不飛。
鄉國近來音信斷。

沈確士曰はく、四首猶ほ盛唐に近し、宋宗元曰はく、思切情眞。

宴城東莊

崔敏童

一年又過一年春。
能向花前幾回醉。

百歲曾無百歲人。
十千沽酒莫辭貧。

敏童は惠童の弟、城東莊は即ち惠童の池第なり、この詩、及時行樂の意を述べて以て一夕の沈醉を促し、十千の使費を惜しむなからしむ、故に惠童之に答へて、

奉和同前

崔惠童

一月主人笑幾回。相逢相值且銜杯。
眼看春色如流水。今日殘花昨日開。

と云ふなり。前詩已に人壽の移り易きを言ふ、この首更に花前昨今の變を説く、その意進むこと一層、風流放達の懷は則ち一なり、竝に富貴人家執袴子弟の口角に非ず、以て兄弟の賢を卜すべきなり。

玄宗の愛女晉國公主、崔惠童に降嫁す、是れ崔は即ち唐室の駙馬たり、杜少陵が集に崔駙馬山亭宴集の一律あり、

蕭史幽棲地。林間踏鳳毛。
客醉揮金碗。詩成得繡袍。
清秋多宴會。終日困香醪。

所謂山亭は即ち城東莊たるを知る、崔已に乘龍の嬌客を以て反つて汎流亂石の間に幽棲し、日に杜陵の野老と唱酬す、その胸襟の曠脱亦想ひ見るべし。

宿疎陂驛

王周

秋染棠梨葉半紅。荊州東望草平空。
誰知孤宦天涯意。微雨蕭蕭古驛中。

王周は五代の時の進士、曾て巴蜀に宦す、疎陂驛は蓋し荊南の地、干戈騷擾、世亂れて麻の如きに當りて、身僻郷に宦し、荒涼の景物を望む、況や古驛伴なく、微雨正に蕭蕭たるをや、通篇淒涼の情緒、以て人の心脾に沁透すべし。

塞下曲

釋皎然

寒塞無因見落梅。胡人吹入笛聲來。
勞勞亭上春應度。夜夜城南戰未回。

唐代の緇流、能詩のもの頗る衆し(上卷二百三)、集の今に存するものは、只皎然・齊己及び貫休の三人のみ。皎然、字は清晝、俗姓は謝、即ち謝靈運が十世の孫なり、杼山の妙喜寺に居り、靈徹・陸羽と友たり、顔真卿、湘州

の刺史と爲り、韻海鏡源を選す、皎然その論著に與り、これに由つて聲譽一時に籍甚す、又、陸羽曾て一亭を創す、顔真卿爲に三癸亭の扁額を大書し、皎然乃ち詩を賦して之を落す、時に三絶と稱すと云ふ。この詩塞下曲、笛中の落梅に因つて、故園の春色に想到し、夜夜徒らに笛聲を聞いて、身の戰役に暇なきを悲しむ、出色と爲さずと雖も情意頗る遠し。勞勞亭は金陵送客の處、太白の詩に見ゆるもの、末句暗に戰城南の樂府名を用ふ、此れ盧弼が邊庭四時怨「朔風吹雪」の一章、飲馬長城窟の樂府名を用ひたると同一人の風氣に屬す。唐仲言云ふ、于鱗塞下の諸作を選す、大都後對の工なるものを取る、雕弓(即ち水鼓)・朔風(涼州歌)・平沙(水調歌)・寒塞(調上)の四章は骨高しと雖も、風韻絶だ少し、白璧の瑕、終に掩ふ能はずと、此れ頗る理あり。

要するに皎然の詩は清と雖も而して弱、縮流たるが故に深く論ぜざるのみ、趙璘が因話錄に云はく、皎然本と律詩に工なり、嘗て韋蘇州に謁し、詩體の合はざるを恐れ、乃ち舟中に於て拏へ、古體十數篇を作りて贊と爲す、韋公全く稱賞せず、皎然極めて失望し、明日その舊製を寫して之を獻す、韋公吟諷し、大いに歎詠を加ふ、因つて謂つて曰はく、師幾んど聲名を失す、何んぞ但、工とする所を以て投せられずして、猥に老夫の意を希へるぞ、人は各、得る所あり、卒かに能く致すに非ずと、皎然大いにその鑒別の精に服したりと云ふ、己れの能はざる所を以て他人の意に適合するあらんことを求む、是れ皎然が求名太だ過ぐるの失なり、天下此れに類するもの甚だ多し、その服善の誠に至つては、反つて之を今人に求め易すからず、歎ずべし。

皎然曾て詩式五卷を撰し、兼ねて古今人の詩を評す、論ずるもの以て議論精當にして取舍公に従ひ、狂瀾を整頓し、騷雅を潤色すとす、然れどもその書散佚已に久し、今傳ふる所の皎然詩式一卷は實に好事者の摭拾に出で挿入する頗る多し、據つて以て信とすべからず、その偷語・偷意・偷勢の三詩例の如きは、頗る人の談助

に資す、又、十九字を以て詩の體を括し、毎字に注釋を下したる、譬へば風韻切暢を高と曰ひ、體格開放を逸と曰ふが如きの類、頗る神解あり、定めて晝公の手に出づ、その靜遠二字を發明する尤も妙、靜字下に云はく、「非、如、松、風、不、動。林、狹、未、鳴。乃、謂、意、中、之、靜。」遠字下に云はく、「非、謂、森、森、望、水。杳、杳、看、山。乃、謂、意、中、之、遠。」又、混沒格の一條に「此道如夏姬當爐。似蕩而貞。」の語あり、夏は當に是れ胡の誤りなるべし。何文煥の詩話考案には、夏姬に當爐の事なきを以て、當に文君に作るべしと謂へり、紀曉嵐駁して云はく、知らず此れは辛延年が羽林郎の詩「胡姬年十五。春日獨當爐。」の事を用ふ、特に夏の字誤るも、姬の字は誤らず、必ずしも改めて文君に作らず、且つ延年の詩に稱す、「貽我青銅鏡。結我紅羅襦。不惜紅羅裂。何論輕賤軀。」所謂蕩に似たるものなり、又稱す、「男兒愛後婦。女子重前夫。人生各有分。貴賤不相逾。多謝金吾子。私愛徒區區。」所謂貞なるものなり、文君の如きは越禮して私奔す、安んぞ蕩に似て而して貞と曰ふことを得ん乎と、この考据頗る精、聊か附記して詩式を閱覽するもの、一考に供す。

初め房瑁終南峻壁の下に隠る、往々湫中の龍吟を聞く、聲清にして靜、人の邪想を滌す、時に僧あり、潛かに三金を憂して以てその聲を寫すに、惟、銅鑪だ似たり、後、房瑁山寺に往來し、林嶺間に聲あるを聞き、因つて僧に命じてその器を出さしめ、歎じて曰はく此れ眞に龍吟なりと、大曆中秦僧その法を傳へて桐江に到る、皎然之を愛し、常に自ら銅碗を憂して之に效ひ以て深寂を慰せしと云ふ、先君子(森香)帷を屋州柳城の桑三軒に下し、社を結び詩を賦し、彙して一卷と爲し刻して以て行ふ、その書銅椅龍吟と名づく、蓋し此れに取るなり。

僧院

釋靈一

虎溪閑月引相過。
無限青山行欲盡。

帶雪松枝掛薜蘿。
白雲深處老僧多。

此れ純然たる縞素の家風、閒月相引き偶、此に經行す、松蘿の雪を帶ぶを見て、已に塵外に超然たるの想あり、忽ち青山盡きんと欲するの處、雲臥の老僧殊に多きを見る、以て與に物外の心を談ずべしとなり、傳に稱す、靈一は剡中の人、童子にして出家し、餅鉢の外一物あることなし、天性超穎にして謝靈運の游山を慕ひ、麻源の第三谷中に隠れ、苜を結んで讀書す。後、白業精進し、若耶溪の雲門寺に居る、從學のもの四方より至る。尤も詩に工に、氣質淳和にして格律清暢す、兩浙の名山暨び衡盧の諸甲刹、悉く以て經行し、皇甫冉兄弟、嚴少府・朱山人・微上人等と詩友たり、酬贈甚だ多し、聲調に刻意して、苦心倦まず、譽を叢林に馳す云云、高仲武が中興閒氣集にも、一公は尅意精妙にして、士大夫と更唱遞和す、「泉湧塔前地。雲生戶外峰。」の如き則ち道猷・寶月も曾て何ぞ此に及ばんと云へり。「泉湧」の二句は、即ちその天柱觀に宿するの詩の後聯たり。曾て新泉の詩を賦す、

泉源新湧出。

洞澈映纖雲。

稍落芙蓉沼。

初淹苔薜蘿。

了將空色淨。

素與衆流分。

若對清宵月。

冷然夢裏聞。

後聯十四字自ら負ふ所亦淺からず、劉文房(後)和して曰はく、
東林一泉水。復與遠公期。
石淺寒流處。山空夜落時。
夢關聞細響。慮澹向清漪。
動靜皆無意。唯應道者知。
慮澹五字清澈愛すべし、因つて附記を加ふ。

索引

作者名の下括弧内の数字は上巻
附載「作者略傳」の頁数を示す

ア行

之作(七絶)

下三三

章元旦(三)

興慶池侍宴應制(七律) 下 一八

章莊(三)

古別離(七絶) 下 四二

于武陵(二)

勸酒(五絶) 下 四八

衛萬(二〇)

吳宮怨(七古) 上 二六

王維(一七)

送別(五古) 上 一六

答張五弟(七古)

終南山(五律)

過香積寺(同)

登辨覺寺(五律) 上 一三

送平淡然判官(同) 上 一七

送劉司直赴安西(同) 上 一六

送邢桂州(同) 上 一七

使至塞上(同) 上 一七

觀獵(同) 上 一八

奉和聖製暮春送朝集使歸郡應

制(五言排律) 上 三〇

送李太守赴上洛(同) 上 三〇

送秘書晁監還日本(同) 上 三〇

和賈至舍人早朝大明宮之作

(七律) 下 三五

和太常韋主簿五郎溫泉寓目

(同) 下 三七

大同殿生玉芝 龍池上有慶雲

百官共觀 聖恩便賜燕樂 敢

書即事(同) 下 三九

奉和聖製從蓬萊向興慶閣道中

留春雨中春望之作應制(同)

韋應物(一八)

幽居(五古) 上 三五

自鞏洛舟行入黃河卽事寄府縣

僚友(七律) 下 一六

秋夜寄丘二十二員外(五絶)

下 三九

聽江笛送陸侍御(同)

下 三〇

聞雁(同) 下 三一

答李潛(同) 下 三一

登樓寄王卿(七絶) 下 三二

酬柳郎中春日歸揚州南郭見別

敕賜百官櫻桃(七律) 下六一
 酌酒與裴迪(同) 下六六
 酬郭給事(同) 下七〇
 過乘如禪師蕭居士嵩丘蘭若(同) 下七三
 臨高臺送黎拾遺(五絕) 下一九六
 班婕妤(同) 下一九七
 雜詩(同) 下二〇〇
 鹿柴(同) 下二〇〇
 竹里館(同) 下二〇三
 少年行(七絕) 下二〇九
 九月九日憶山東兄弟(同) 下三三〇
 與盧員外象過崔處士興宗林亭(同) 下三三一
 送韋評事(同) 下三三三
 送沈子福之江南(同) 下三三三
 王翰(二八)
 涼州詞(七絕) 下二七
 王建(二九)
 十五夜望月(七絕) 下四三
 王之渙(三五)
 登鶴雀樓(五絕) 下三三
 涼州詞(七絕) 下六一
 九日送別(同) 下六四
 王周(三三)
 宿疎曠驛(七絕) 下四六
 王昌齡(四〇)
 城傍曲(七古) 上一〇八
 胡笳曲(五律) 上三三
 萬歲樓(七律) 下二〇三
 送郭司倉(五絕) 下二二
 答武陵田太守(同) 下二二
 春宮曲(七絕) 下三〇
 西宮春怨(同) 下三三
 西宮秋怨(同) 下三四
 長信秋詞(同) 下三五
 青樓曲(同) 下三七
 閨怨(同) 下三八
 出塞行(同) 下三九
 從軍行三首(同) 下三〇
 梁苑(同) 下三四
 芙蓉樓送辛漸(同) 下三四
 送薛大赴安陸(同) 下三五
 送別魏三(同) 下三七
 盧溪別舍(同) 下三八
 重別李評事(同) 下三八
 王績(三一)
 野望(五律) 上一六

王表(四〇)
 成德樂(七絕) 下四七

楊柳枝(七絕) 下四四
 力行

岳陽樓重宴別王八員外貶長沙(七絕) 下四一
 賈會(三三)

王勃(一九)
 滕王閣(七古) 上三三
 杜少府之任蜀州(五律) 上一三三
 蜀中九日(七絕) 下二五六

蓋嘉運(二七)
 伊州歌二首(七絕) 下二四九

奉和春日出苑(七律) 下三三
 賀知章(三五)

歐陽詹(元)
 題延平劍潭(七絕) 下四三〇

郭振(三五)
 子夜春歌(五絕) 下一八四

題袁氏別業(五絕) 下一七六
 賈島(二七)

王烈(三二)
 塞上曲二首(七絕) 下四三七

賈至(三三)
 早朝大明宮呈兩省僚友(七律) 下五一
 春思二首(七絕) 下三七
 西亭春望 下三九
 初至巴陵與李十二白同泛洞庭湖(同) 下三九
 送李侍郎赴常州(同) 下四〇

尋隱者不遇(五絕) 下四三
 度桑乾(七絕) 下四六
 韓翃(二六)

王維(三三)
 次北固山下(五律) 二二六

寒食(七絕) 下三九五
 送客知鄂州(同) 下三九六
 宿石邑山中(同) 下三七

韓愈 (三四)

奉和康部盧四兄曹長元日朝迴 (七律) 下 一七三

魏徵 (二六)

述懷 (五古) 上 二

蔡母潛 (三三)

宿龍興寺 (五律) 上 三〇

丘爲 (三五)

左掖梨花 (五絕) 下 三三

許渾 (三〇)

秋思 (七絕) 下 四三

荆叔 (三七)

題慈恩塔 (五絕) 下 四九

元稹 (三〇)

聞白樂天左降江州司馬 (七絕) 下 四二

玄宗皇帝 (三二)

幸蜀西至劍門 (五律) 上 一五五

嚴武 (二六)

軍城早秋 (七絕) 下 六七

耿湋 (二六)

秋日 (五絕) 下 三三

高適 (一八)

宋中 (五古) 上 三〇

邯鄲少年行 (七古) 上 九二

人日寄杜二拾遺 (同) 上 九三

送劉評事充朔方判官賦得征馬

嘶 (五律) 上 一八八

送鄭侍御謫闕中 (同) 上 一九〇

使清夷軍入居庸 (同) 上 一九二

自薊北歸 (同) 上 一九三

醉後贈張九旭 (同) 上 一九三

送柴司戶充劉判官之嶺外 (五言排律) 上 三二三

陪寶侍御泛靈雲池 (同) 上 三二四

送李少府貶峽中王少府貶長沙 (七律) 下 九一

夜別韋司士 (同) 下 九三

詠史 (五絕) 下 二八

田家春望 (同) 下 二九

九曲詞 (七絕) 下 三七三

除夜作 (同) 下 三七四

塞上聞吹笛 (同) 下 三七五

別董大 (同) 下 三七五

皇甫冉 (二六)

下 八六

崔徽畫 (三三)

宴城東莊 (七絕) 下 四六一

崔魯 (三一)

華清宮 (七絕) 下 四五一

司空曙 (二六)

別盧秦卿 (五絕) 下 三三五

司馬禮 (三一)

宮怨 (七絕) 下 四四八

羅皎然 (三三)

塞下曲 (七絕) 下 四六三

羅處默 (三三)

聖果寺 (五律) 上 三三六

懷好怨 (五絕) 下 三三三

送魏十六還蘇州 (七絕) 下 三九四

曾山送別 (同) 下 三九四

顧況 (二九)

聽角思歸 下 四〇五

宿昭應 下 四〇六

湖中 下 四〇七

吳象之 (二八)

少年行 (七絕) 下 三八五

サ 行

蔡希寂 (二八)

洛陽客舍逢祖詠留宴 (七絕) 下 三八五

崔惠童 (三三)

奉和宴城東莊 (七絕) 下 四六二

崔顥 (一九)

孟門行 (七古) 上 一〇四

黃鶴樓 (七律) 下 三九

行經華陰 (同) 下 四六

長干行 (五絕) 下 三七

崔國輔 (三五)

長信草 (五絕) 下 三〇三

少年行 (同) 下 三〇四

九日 (七絕) 下 三八〇

崔署 (一九)

早發交崖山還太室作 (五古) 上 三六

九日登仙臺早劉明府 (七律)

釋靈一 (三)

僧院 (七絕) 下四六

朱放 (三)

題竹林寺 (五絕) 下三三

蕭穎士 (三)

九日陪元魯山登北城留別 (五絕) 下三五

常建 (一)

西山 (五古) 上二八

破山寺後禪院 (五律) 上三五

塞下曲二首 (七絕) 下三六

送宇文六 (同) 下三七

三日尋李九莊 (同) 下三二

岑參 (一)

與高適薛據同登慈恩寺浮圖 (五古)

登古鄴城 (七古) 上三

韋員外家花樹歌 (同) 上五

胡笳歌送顏真卿使赴河隴 (同) 上九

送張子尉南海 (五律) 上八

寄左省杜拾遺 (同) 上八

登總持閣 (同) 上八

早秋與諸子登號州西亭觀眺 (五言排律) 上三

和賈至舍人早朝大明宮之作 (七律) 下九

和祠部王員外雪後早朝即事 (同) 下九

西掖省即事 (同) 下九

九日使君席奉餞衛中丞赴長水 (同) 下九

首春渭西郊行呈藍田張二主簿 (同) 下九

暮春號州東亭送李司馬歸扶風別廬 (同) 下十

行軍九日思長安故園 (五絕) 下三

見渭水思秦川 (同) 下三

封大夫破播仙凱歌二首 (七絕) 下三

首寄寄家人 (同) 下四

玉關寄長安李主簿 (同) 下四

逢入京使 (同) 下四

磧中作 (同) 下四

號州後亭送李判官使赴晉絳得秋字 (同) 下七

送人還京 (同) 下五

赴北庭度隴思家 (同) 下五

酒泉太守席上醉後作 (同) 下五

送劉判官赴磧西 (同) 下六

山房春事 (七絕) 下三七

沈期 (三)

酬蘇員外味玄夏晚寓直省中見贈 (五言排律) 上三六

同韋舍人早朝 (同) 上三七

古意 (七律) 下二

龍池篇 (同) 下七

侍宴安樂公主新宅應制 (同) 下九

紅樓院應制 (同) 下三

再入道場紀事應制 (同) 下四

遙同杜員外審言過嶺 (同) 下六

邛山 (七絕) 下三六

西鄙人 (三七)

哥舒歌 (五絕) 下三一

薛瑩 (二)

秋日湖上 (五絕) 下四八

薛業 (一)

洪州客舍柳博士芳 (七古) 上二九

錢起 (二)

闕下贈裴舍人 (七律) 下一五九

和王員外晴雪早朝 (同) 下一六一

逢俠者 (五絕) 下三八

江行無題 (同) 下三九

歸雁 (七絕) 下三九

宋之問 (一)

下山歌 (七古) 上三四

至端州驛見杜五審言沈三任期 (同) 上三四

闕五朝隱王二無競題壁慨然成 (同) 上三四

詠 (同) 上五

扈從登封途中作 (五律) 上一四

送沙門弘景道俊玄奘還荊州應制 (同) 上一四

奉和幸長安故城未央應制 (五言排律) 上一四

奉和晦日幸昆明池應制 (同) 上一六

和姚給事寓直之作 (同) 上一六

早發始興江口至盧氏村作 (同) 上一六

送司馬道士游天台 (七絕) 下一六

江南旅情 (五律) 上三七

蘇氏別業 (同) 上三九

清明宴司勳劉郎中別業 (五言排律) 上三五

組詠 (三)

江南旅情 (五律) 上三七

蘇氏別業 (同) 上三九

清明宴司勳劉郎中別業 (五言排律) 上三五

望薊門(七律) 下八四
終南望餘雪(五絕) 下三三

蘇頌(三)

同錢揚將軍兼原州都督御史中丞(五言排律) 上三六四
侍宴安樂公主新宅應制(七律) 下三

奉和春日幸望春宮應制(同) 下三

奉和初春幸太平公主南莊應制(同) 下三

汾上驚秋(五絕) 下二八六

蘇味道(三)

在廣開崔馬二御史並登相臺(五言排律) 上三五四

孫逖(三)

宿雲門寺閣(五律) 上一五四

和左司張員外自洛使入京中路先赴長安逢立春日贈韋侍御及諸公(七律) 下三六

同洛陽李少府觀永樂公主入蕃(五絕) 下一八九

夕行

戴叔倫(三)

三閭廟(五絕) 下三七
夜發袁江寄李穎川劉侍郎 下四〇八

段成式(三)

折楊柳(七絕) 下四七

張謂(三)

贈喬林(七古) 上一〇五

湖中對酒作(同) 上一〇七
同王徵君洞庭有懷(五律) 上三三

杜侍御送賁物戲贈(七律) 下八九

題長安主人壁(七絕) 下三六〇
送人使河源(同) 下六一

張說(三)

恩敕麗正殿書院賜宴應制得林字(五律) 上一四七
還至端州驛前與高六別處(同) 上一四九

幽州夜飲(同) 上一五一
奉和聖製途經華嶽(五言排律) 上一六六

幽州新歲作(七律) 下三六
滄湖山寺(同) 下三六

送同蔡起居假松篇(七律) 下三〇

蜀道後期(五絕) 下一八七
送梁六(七絕) 下二六六

趙嘏(三)

江樓書感(七絕) 下四四四

張諤(三) 下四四六
九日宴(七絕) 下四四六

張九齡(二)

感遇(五古) 上四
奉和聖製早度蒲關(五言排律) 上三九九

和許給事直夜簡諸公(同) 上三九一

酬趙二侍御史西軍贈兩省舊寮之作(同) 上三九四
奉和聖製送尚書燕國公說赴朝

方軍(五言排律) 上三九六

照鏡見白髮(五絕) 下一八八

張喬(三)

宴邊將(七絕) 下四四九
張均(三) 下四四九

岳陽晚景(五律) 上三三二

張繼(二)

楓橋夜泊 下四〇三
張敬忠(三) 下四五六

邊詞(七絕) 下四五六

張若虛(三) 下四五六
春江花月夜(七古) 上一二〇

張巡(三)

聞笛(五律) 上三七

張子容(三) 上三七
水調歌第一疊(七絕) 下四三三
涼州歌第二疊(同) 下四三四
水鼓子第一曲(同) 下四三四

張籍(二)

涼州詞(七絕) 下四三一

張仲素(二) 下四三一
漢苑行(七絕) 下四三四
塞下曲二首(同) 下四三五
秋閨思(同) 下四三七

張潮(二)

江南行(七絕) 下三六六

張南史(二) 下三六六

張南史(二)

陸勝宅秋雨中探韻(七律)

下一六七

張祐(三)

題松汀驛(五律)

上三三五

胡渭州(七絕)

下四三三

雨淋鈴(同)

下四三四

魏夫人(同)

下四三五

儲光羲(三五)

洛陽道獻呂四郎中(五絕)

下三〇八

長安道(同)

下三〇〇

關山月(同)

下三一一

寄孫山人(七絕)

下三五七

陳子昂(二六)

薊丘覽古(五古)

上二六六

晚次樂鄉縣(五律)

上二二三

春夜別友人(五律)

上一三五

送別崔著作東征(同)

上一三六

白帝城懷古(五言排律)

上一三五

峴山懷古(同)

上一三五

贈喬侍御(五絕)

下一八三

陳祐(三)

雉詩(七絕)

下四三五

鄭審(三)

奉使巡檢兩京路種果樹事畢入

秦因詠歌(五言排律) 上三四六

丁仙芝(二〇)

餘杭醉歌贈吳山人(七古)

上二三四

渡揚子江(五律)

上三三六

杜審言(三)

蓬萊三殿侍宴奉敕詠終南山

(五律) 上一三八

和晉陵陸丞相早春游望(同)

上一三九

和康五望月有懷(同)

上一四〇

送崔融(同)

上一四一

贈蘇味道(五言排律)

上一三七

渡湘江(七絕)

下二五八

贈藍綰書記(同)

下二五九

戲贈趙使君美人(同)

下二六〇

杜甫(一七)

後出塞(五古)

上一二

玉華宮(同)

上一四

貧交行(七古)

上一六

短歌行贈王郎司直(同)

上一六一

高都護驄馬行(同)

上一六四

送孔巢父謝病歸游江東兼呈李

白(同) 上一六七

飲中八仙歌(七古)

上二七

哀江頭(同)

上二八

韋諷錄事宅觀曹將軍畫馬圖引

上二九

(同)

上二九

丹青引贈曹將軍霸(同)

上三〇

登兗州城樓(五律)

上三〇

房兵曹胡馬(同)

上三一

春宿左省(同)

上三一

秦州雜詩(同)

上三一

送遠(同)

上三一

題玄武禪師屋壁(同)

上三一

玉臺觀(同)

上三一

觀李固請司馬題山水圖(同)

上三一

禹廟(同)

上三一

旅夜書懷(同)

上三一

船下夔州郭宿雨溼不得上岸別

王十二判官(同)

登岳陽樓(同)

上三一

行次昭陵(五言排律)

上三六

重經昭陵(同)

上三六

王閩州建奉酬十一身惜別之作

上三六

(同)

上三六

奉歸(同)

上三六

江陵望幸(同)

上三六

奉觀嚴鄭公廳事峴山沓江圖

上三六

(同)

上三六

冬日洛城北謁玄元皇帝廟廟有

吳道子畫五聖圖(同)

題張氏隱居(七律)

上三五

宣政殿退朝晚出左掖(同)

下三四

紫宸殿退朝口號(同)

下三四

曲江對酒(同)

下三三

九日藍田崔氏莊(同)

下三三

野望(同)

下三三

登樓(同)

下三三

秋興四首(同)

下三三

吹笛(七律)

下一四九

關夜(同)

下一五一

返照(同)

下一五二

登高(同)

下一五七

復愁(五絕)

下一五七

絕句(同)

下一五七

贈花卿(七絕)

下一五六

重贈鄭鍊(同)

下一五六

奉和嚴國公軍城早秋(同)

下一五六

解悶(同)

下一五六

書堂飲既夜復邀李尙書

下馬

月下賦(同)

下一五六

八行

裴迪(三五)

孟城坳(五絕)

下一三三

鹿柴 (五絕)

下三四

古別離 (五絕)

下三二

郡中卽事 (七絕)

下四六

萬 楚 (三四)

五日觀妓 (七律)

下 八七

孟浩然 (三)

臨洞庭 (五律)

上 一六六

登樓 (同)

下 四六

武元衡 (三九)

送盧起居 (七絕)

下 四三三

嘉陵驛 (同)

下 四三五

陪張丞相自松滋江東泊渚宮 (五言排律)

上 三二〇

駱賓王 (三〇)

文宗皇帝 (三七)

宮中題 (五絕)

下 二四四

送朱大入秦 (五絕)

下 二〇五

帝京篇 (七古)

上 二二

包 何 (三九)

寄楊侍御

下 四〇九

楊 炯 (三)

從軍行 (五律)

上 三三〇

李 益 (三四)

鹽州過胡兒飲馬泉 (七律)

下 一六九

マ行

孟 郊 (三七)

羊士謩 (三九)

夜送趙縱 (五絕)

下 一八〇

幽州 (五絕)

下 二二六

汴河曲 (七絕)

下 四〇九

聽曉角 (同)

下 四二〇

夜上受降城聞笛 (同)

下 四二二

從軍北征 (七絕)

下 四二二

李 華 (三六)

春行寄興 (七絕)

下 三九〇

寄韓勣 (七絕)

下 三九九

李適之 (三五)

罷相作 (五絕)

下 三三三

李 頎 (一九)

崔五丈園屏風賦得烏孫佩刀 (七古)

上 一〇〇

望秦川 (五律)

上 三三〇

聖善閣送裴迪入京 (五言排律)

上 三三三

長寧公主東莊侍宴 (五律)

上 一四六

李 端 (二六)

送劉侍御

下 四〇〇

送魏萬之京 (七律)

下 三三

寄盧司勳員外 (同)

下 七

題璿公山池 (同)

下 六

寄裴母三 (同)

下 九

送李回 (同)

下 八

宿登公禪房聞梵 (同)

下 八三

贈盧五舊居 (同)

下 八三

奉送五叔入京兼寄裴母三

下 八三

李 拯 (三)

退朝望終南山 (七絕)

下 四二〇

李 白 (二六)

子夜吳歌 (五古)

上 七

李商隱 (三〇)

漢宮詞 (七絕)

下 四三六

夜雨寄北 (同)

下 四四〇

寄令狐郎中 (同)

下 四四二

烏夜啼 (七古)

上 五六

江上吟 (同)

上 五六

塞下曲 (五律)

上 一五七

- 秋思 (五律) 上 一五九
- 送友人 (同) 上 一六一
- 送友人入蜀 (同) 上 一六三
- 秋登宣城謝朓北樓 (同) 上 一六四
- 送儲邕之武昌 (五言排律) 上 一六七
- 登金陵鳳皇臺 (七律) 下 一六八
- 靜夜思 (五絕) 下 一六〇
- 怨情 (同) 下 一六三
- 秋浦歌 (同) 下 一六三
- 獨坐敬亭山 (同) 下 一六五
- 見京兆韋參軍量移東陽 (同) 下 一六五
- 清平調詞三首 (七絕) 下 一六八
- 客中行 (同) 下 一六〇
- 峨眉山月歌 (同) 下 一六一
- 上皇西巡南京歌二首 (同) 下 一六二
- 聞王昌齡左遷龍標尉遙有此寄 下 一六二
- (七絕) 下 一六九
- 黃鶴樓送孟浩然之廣陵 (同) 下 一六一
- 陪族叔刑部侍郎擘及中書舍人賈至游洞庭湖 (同) 下 一六六
- 望天門山 (同) 下 一七一
- 早發白帝城 (同) 下 一七〇
- 秋下荊門 (同) 下 一七〇
- 蘇臺覽古 (同) 下 一七〇
- 越中懷古 (同) 下 一七〇
- 與史郎中欽聽黃鶴樓中吹笛 (同) 下 一七〇
- 春夜洛城聞笛 (同) 下 一七〇
- 劉禹錫 (三) 下 一七〇
- 秋風引 (五絕) 下 一七〇
- 楊柳枝詞 (七絕) 下 一七〇
- 浪淘沙詞 (同) 下 一七〇
- 自朗州至京戲贈看花諸君子 下 一七〇
- (七絕) 下 一七六
- 與歌者何戡 (同) 下 一七九
- 柳宗元 (一八) 上 一七六
- 南園中題 上 一七六
- 登柳州城樓寄漳汀封連四州刺史 (七律) 下 一七一
- 登柳州鸞山 (五絕) 下 一七九
- 酬浩初上人欲登仙人山見貽 (七絕) 下 一七九
- 劉長卿 (三) 上 一七三
- 穆陵關北逢人歸漁陽 (五律) 上 一七三
- 行營酬呂侍御 (五言排律) 上 一七六
- 送鄭說之歙州謁薛侍郎 (同) 上 一七六
- 平蕃曲二首 (五絕) 下 一七七
- 重送裴郎中貶吉州 (七絕) 下 一七七

- 送李判官之潤州行營 (七絕) 下 一六八
- 劉廷芝 (一九) 下 一六九
- 公子行 (七古) 上 一六八
- 代悲白頭翁 (同) 上 一六一
- 劉廷琦 (二七) 上 一六一
- 銅雀臺 (七絕) 下 一六三
- 李 峴 (三三) 下 一六三
- 奉和初春幸太平公主南莊應制 (七律) 下 一六五
- 呂 溫 (三六) 下 一六〇
- 羣路感懷 (五絕) 下 一六〇
- 令狐楚 (三六) 下 一六〇
- 思君恩 (五絕) 下 一六八
- 樓 穎 (三三) 下 一六八
- 西施石 (七絕) 下 一六九
- 郎士元 (三四) 下 一六九
- 贈錢起秋夜宿靈臺寺見寄 (七律) 下 一六三
- 虞照鄰 (一九) 下 一六三
- 長安古意 (七古) 上 一六三
- 盧 僊 (三五) 下 一六六
- 南樓望 (五絕) 下 一六六
- 盧 弼 (三三) 下 一六六
- 和李秀才邊庭四時怨二首 (七絕) 下 一六〇
- 無名氏 下 一六九
- 伊州歌二首 (五絕) 下 一六九
- 答人 (五絕) 下 一七三
- 初過漢江 (七絕) 下 一七五
- 胡笳曲 (同) 下 一七六
- 長安春望 (七律) 下 一六五
- 和張僕射塞下曲 (五絕) 下 一七三
- 盧 綸 (三四) 下 一七三

富山房百文庫

-27-

唐詩選評釋
下

定價壹圓

所 著 作 權	印 檢
------------------	--------

昭和十四年三月六日
昭和十四年三月八日
發行

發行所

東京市神田區神保町一丁目三番地
富山房
電話神田二一七一—八番
振替東京五〇一—番

著者 森 槐 南

著作權者 千葉市登戸五丁目一〇五番地
森 健 郎

發行者 東京市神田區神保町一丁目三番地
富山房

代表者 富山房社長
坂 本 守 正

印刷者 東京市小石川區久堅町一〇八番地
君 島 潔

(印刷製會式株刷印同共)

既刊書目

[1~7] 萬葉代匠記(一)

武田 祐吉 校註
全五六一五頁
定價九十錢 千十二錢

[8] 全金槐和歌集

川田 順 校註
全二六八頁
定價五十錢 千六錢

[9] 列強現勢史・ドイツ

大類 仲 著
全四〇二頁
定價八十錢 千九錢

[14] 若松賤子集

若松 賤子 著
全一八〇頁
定價四十錢 千六錢

[15] 新植物生態美觀

三好 學 著
全一九一頁
定價八十錢 千六錢

[16] 邦樂舞踊辭典

瀧美 清太郎 著
全三四三頁
定價七十錢 千九錢

[17] 西行法師全歌集

尾山 篤二郎 校註
全三九一頁
定價七十錢 千九錢

[10] 大科學者の歩める道

(ローベルト・コッホの生涯)
宮島 幹之助 共 著
全二九四頁
定價六十錢 千六錢

[11] 役の行者

坪内 逍遙 著
全二五三頁
定價五十錢 千六錢

[12] ジオコンダの微笑

オールダス・ハックスリ 著
全一九四頁
定價四十錢 千六錢

[13] ゲーテ箴言集

石中 一 著
全二〇六頁
定價四十錢 千六錢

[18] 西國立志編

中村 正 著
全四七二頁
定價九十錢 千九錢

[19] 國民性十論

芳賀 矢一 校註
全三三三頁
定價三十錢 千六錢

[20] ハムレット

坪内 逍遙 著
全二〇六頁
定價四十錢 千六錢

[21] 兒童の世紀

近世教育史上に光芒を放つエレン・ケイ女史の名著である。女史の著は愛と結核の病、性徳の浄化を説くと共に、生れる子、育てる子の愛を述べ、福利と個性の尊重とを主張熱論し、二十世紀の教育に一大轉機を與へ、現代教育の嚮導として、我が教育界に大きな教養を描いたが、今また改訂の筆を揮つて、『兒童の世紀』を成す。

[22] 世界童話集

全世界の秀れた童話といふ童話が「光のお部屋」から「青いお部屋」まで八つの部屋に分類して収められ、巻にこの童話の童話家諸氏の履歷を以てし、童話集一冊の幼境を拓いてゐる。我子のために良書を採る人の過してならぬ善本として自信を持つて推薦する。

[23] 植物學語彙

植物學上用語が多岐を極めてゐることの不便利は、斯學に従ふ人達の感ぜられてゐるところである。本書は之等の人のために、一々及び各用語に對する解説とが甚だ適切に採配されてゐる。

[24] オルレアンの少女

これは愛國文學の第一である。羊飼ひの少女ジャンヌ、ダルクが、神を奉じて祖國の急に赴き、天晴外敵を斥けて母の國佛蘭西を聖國の地を味はひ、爲に祖國を救つて、母の苦を嘗め、自らもがて、また祖國の熱烈な愛に、いよいよ祖國を斷つて群衆の中に躍り入り、また祖國の熱を挽回し、其身は悲壯な死を遂げる迄、愛國の聖靈に、味方のかゆるみもなく、清む者をして容易に巻を捲く能はざらしめる。

[29] 復軒旅日記

實海博士大槻文彦先生が一身に試みられた九十歳の旅行に於て、定款の糧下、矢立の筆に綴られた旅日記、實學者としての先生の特別な觀察、耳目に觸れるもの一切への仔細な觀察など、その人語を知らうとする人達にとつて此上もない好資料である。更に自傳及年譜を加へてこの一巻を完成する。

[30] 列強現勢史・ロシヤ

さきにドイツ篇を出して絶頂を博したが、今またロシヤ篇成つて狂瀾に見ゆる。ドイツとロシヤとは現下我國民の最大關心事、この二國の現勢を直截に知り得るの書は、これを持って他にない。尙ロシヤ篇に加へたロシヤ地圖は、外務省岩間徹氏の著作に成つたもので、我國に於て最も新しく最も正確なるもの、外にアト利圖寫眞數を加ふ。

[31~32] エゴイスト(自叙)(上)

英の大文豪チャールズ・メリディウスが代表作。全篇に溢る諷刺と、諷刺と皮肉と、逆説と、序第一、本文五十章の巨篇、讀み去り讀み來つて興の盡きざるを知らない。青年實業家ウィロビ・ペターソンが主人の一件は快活聰明なダライム嬢、美しうて仲々貪へぬところのあるクレアラ、内氣なりチシヤの三人を順次に相おろして、我儘一ぱい、自叙一天ばりの苦悶奮闘の、とど心ならずもチシヤを擧げて陥するに至る。天來實業博士、晩年を本書の全譯に傾け、編輯の苦心はその天啓をさへ醒めたかといはれるが、難く採らつて、遂に出版をみすして了つた。今遺愛に乞ふて本文庫に収める。

[25] 評一葉小説全集

樋口一葉の全作品を一本に収めて、各篇毎に長谷川女史による敏活な評註を加へた。一葉の描いた大世界も風俗も、既にその正しい價値の爲には評註を必要とするやうになつた。一葉の消息一つ聞き漏さぬ時雨女史の、結のやうな親身な評註は、それだけでも讀んでたのしく味はひの深いものである。尙「九げくらべ」は特に文藝俱樂部所載當時の挿繪をも加へてある。

[26~27] 唐詩選評釋

萬葉を讀み唐詩選を學べば、東洋の詩心略し領し得たりとして不可なからう。古來本朝に於ても、唐詩に註する者二三にして止まらずと雖も、森博士に至つて遂に古今同歩、其後に於ては唯屋上屋を架する者あるに過ぎない。大博士の詩學が深遠なる餘り、往々難解の處を認くため、今新進の人東大支那文學研究會田島博士を頼はして補註を施し、解説、唐詩人列傳を加へ、努めて卒讀を容易ならしめた。

[28] 新日本陽明學派之哲學

現代が後尾に傳ふるに足るべき善本を覆刊行するのは、本文庫の使命の一つである。本書は明治以降三代を通じて行はれ、その權威は彌が上にも昂揚され、あるが、今また八十を超えて尙堅固たる老博士、その後の研究を集めて本書の改訂を企てられ、爲に、全篇朱を以て充たされ、更に文獻の大増補、「萬井探山」一章の新執筆等、全く面目一新せる新訂版となつた。列傳體の日本陽明學史として、國體學の權威書として、時人の必讀を俟つ。

[33] おらんだ正月

史的人物中より科擧五十二名を採り、平島な口語文にその傳を敘す。英訳註を加へるもの、これを足しとせぬが、科擧者のみを蒐めて一書に傳するは本書を以て濫觴としよう。加ふるに七十八回の挿繪あり、尙條・朝野等一もあまらず、又口繪の名畫、おらんだ正月を説ふ人々」は本書の題名の由来を讀むに便明するであらう。

[34~35] 狂言三百番集(上)

狂言に瀟々たる英は日本人の英そのものである。狂言は一應觀賞すべきものであるが、英の文藝としての價値も亦却すべくもない。天の命戸を開いた神々の英は宣明期に及んでこの狂言文藝の大成となつた。本書の校註者は醫者狂言集成を編み、今又その後に發見せる十六曲を加へて校註を施し、裝束附・照註をも添へて最善のテキストとして提供した。三十三頁の狂言解説及び寫眞プレート・カットをたむるべきもの。

[36] 芭蕉翁繪詞傳

芭蕉を讀んで繪詞傳に及ばざるはない。繪を以て傳する蕉詩一代、見ても楽しく讀んで癒しき、まさに風韻の畫といふべく、高士の玩具と申さば當れりや否や、清風風韻、一巻が讀し出す喜びしをりの境地、また俗腸を洗ふに足らんか。

[37] 言語地理學

フランス近代の言語地理界に於て第一の書として推される本書は、...

[38] フランス戦話集

フランス戦事文庫の粹を蒐めてこの一巻を成す。デュアメル、...

[39-40] ナポレオン時代史

不世出の英雄ナポレオン出でて揺るがすフランスの、否、ヨーロッパの...

[41] ルーマニア日記

ルーマニア・ドイツの文壇に於て最も注目するカロッツァが、...

[42] 科学物語

フーブルは世界の子供達にとつて、「科学の小父さん」である。...

[43] 學童日誌

各作オレの日は二三にして止まらぬが、この異國の名作を始めて...

[44] 上田秋成全集

貞享元祿の世近松に西園に高道に傳として開ける我が文藝も、...

[45] 大乘起信論

總論一巻は佛敎教義論の書として、古來各宗各派の別なく研究されて...

[46] 幼年時代

ドイツの、西中歐文壇の王座を占めるカロッツァが、十六篇のをさなものの...

[47] みづと土

あなどりぬい「みづ、土、なんとなど難い、又人間に買取する...

[48] 中央亞細亞探検記

世界の秘密境中央亞細亞は、ヘディンの敢死的探検とこのルポルタージ...

[49] ギリシャ悲劇時代の哲學

ニイチエの理解はニイチエの古代ギリシャ理解を解説することから始...

[60] 教育と社會學

今日、教育の基礎として社會學の必要を説く必要はない。既に社會學なしに教育を云ふことは不可能だからである。デュルケムはフランス社會學の創始者にして、科學に於ける客觀主義を確立した人。全日本教育人のために本書を推薦したい。

全山田 全通九 全利六
定價四十圓 千六圓

[51] 明治史 大隈伯昔日譚

大隈侯が四城寺清氏を早稲田の書齋に引いて、口述を筆記せしめたるの、その教育を極めた生涯は傳記として興味を能くするは勿論、明治史の資料として重要視すべきものである。尚本書の校訂者京口氏は大隈侯によりて得られる明治史資料をこの一書に集中するの意圖から、早稲田清氏・大隈侯の日記・大隈侯昔日譚の三書より選定採録して大隈伯昔日譚の註を附し、突き明治史資料として讀者に提供せられた。

全京口 全城寺 全二校 全註
定價九十圓 千十二圓

[62~64] アラビヤン・ナイト

一千一夜の物語の名アラビヤンナイト(アラビヤ夜話)は、この天地の間に二つとない最大奇書だとさへいはれてをります。この輝かしい話の中からは、少年少女讀者の心のびびりにもなるやうな美しい話もつらしい話、罪のない話三十篇をえらび出して、やさしい、きれいな文章に書き直したのがこのアラビヤンナイトです。シンドバッドの七航海、アラジンとよしぎなランプ、アリババの話をはじめ、アラビヤンナイトのお話として世界中に知られてゐる、おもしろいお話はもろもろこの中に入れてあります。

各杉谷 代水 各三三・三三・三八
定價各四十圓 千六圓

[58] 赤い蠟燭と人魚

我々兒童文學界の第一人者たる未明先生の童話は、未明童話集をはじめいろいろの本になつて出てありますが、長い年代の間になつて代表的な作品の手にまともな本はまだ一冊も出てをりません。この本は未明先生みづから奮心して信じてゐる話三十篇を長いこの本の全作篇からえらび出して、ほゞ年代順に新しく編まれたものであります。一般に未明童話の研究、愛好者の諸君は云ふまでもなく、まだおそらくは名ばかり聞いて、まだその作に親しむ折はなかつた少年少女の皆さんが、この本によつて未明童話を十分に深く味はつていただきたいのであります。

全小川 全三七 全明
定價八十圓 千九圓

[59] 棕鳥の夢

美しい童話に童話に、わが少年少女の皆様とは長年の親しみのある濱田廣介先生の幼年童話集であります。お母様お姉様が幼いお子様、御きやうだい達からお話をせがまれたとき、そして即座に、お話と思ひ出されなかつたり、せつなく思ひ出しても半分お話を忘れてしまつたせなかつたりした場合は、さつそく役に立つやう一々のお話が一年春夏秋冬、季節々々のうつり廻りにあはせて、それごとく似つかはしい題によつて作られてゐます。

全廣田 全二廣 全介
定價八十圓 千九圓

アンデルセン童話集

1 小さい人魚姫
2 一本足の兵隊
8 雪の女王

各山正 各二三〇 全期
定價各四十圓 千六圓

[55] 新西遊記

有名なる孫悟空、猪八戒らが、三蔵法師のお供をしてたふといお経を取りに、支那から天然の印度まで行くの道は十四年もの長い旅をしてそれこそアラビヤンナイトにもまけない、いろ／＼の不思議に出あふ東洋の大冒険譚であります。讀者はむづかしい漢文の原作を、できるだけやさしい言葉にくだいて、みごとな少年讀物にしあげられたのであります。

全中島 全三島 全六島 全八島 全九島
定價八十圓 千八圓

[56] 小娘こがね丸

明治大正二つの時代にかけて育つた人で多いか少ないか、近代日本童話の父 巖谷小波先生のお伽噺や少年少女小説をまるごと讀まずに讀むたよふものはたゞの一人もありません。「こがね丸」は先生十二歳の若年ではじめて、新しい少年少女文學を開くことを思ひ立たれたときのお伽噺集を指します。

全巖谷 全内秋 全小波 全四解 全六義
定價四十圓 千六圓

[57] 新八犬傳

先在が少年世界の主筆として、一ばん花々に動かれてゐた時分のは、こののりきつた大傑作集で、その時分のどれれもおぼろひの名作をえらんであります。昭和の少年少女の諸君にぜひ讀んでいただくべく、「こがね丸」とともに、この二冊のお伽噺集を指します。

全山内 全秋小 全波解 全四義 全六義
定價四十圓 千六圓

[67] 註國文學史十講

芳賀博士は國文學に科學的方法を採入れて、雑誌「和學」の狀態から教ひ、國文學の上田萬年博士と共に、この學問の體系樹立に成功した最初の人である。その意味に於て國文學史十講は日本文學研究史上不滅の遺蹟として永久の生命を持つ。今、門下の俊秀島津博士、精細なる校註をこれに加へ、其後に出でた文獻の盡くを擧げ、「今日の書」として十分に役立つしめる用意の下に校註の努力を惜まれないかつた。

全島津 全久基 全一校 全六義 全註
定價五十圓 千六圓

[68] 敵討

日本人を知るためには敵討を知らねばならない、といはれる程敵討のもつ意味は重大である。しかもこれに就いての文獻を求めれば信憑すべき者の寥寥たるをむしろ意外の感を感じる。故に平出氏の「敵討」がある。小冊能く上古より明治に及ぶ敵討の變遷及一つ一つに就き詳説して陰翳なく、確實な資料による興味深き敘述は、歌麿伎の舞臺をみるに等しい氣易さを以て、眞面目な學問を學び取らせる。

全長平 全出備 全二郎 全四校 全六義 全註
定價四十圓 千六圓

[69] 調言

幸田 露伴 著 全三三三頁 定價七十錢 平九錢

[70] 陣中の豎琴

佐藤 幸夫 著 全一七八頁 定價四十錢 平六錢

[71] 哲學史要

グインデルマン 著 全四二二頁 定價九十錢 平九錢

[72] 新獨逸浪漫派

グインデルマン 著 全四二二頁 定價九十錢 平九錢

[73] ロミオとジュリエット

シェイクスピア 著 全一六六頁 定價三十錢 平八錢

[74] 神童・臍脂・ヒューバートと初戀

ハック ス 著 全一三三頁 定價三十錢 平六錢

[75] フランス短篇小説集I

後編 全三七六頁 定價八十錢 平九錢

續刊廣告

Table with multiple columns listing books and authors. Includes titles like '長芭蕉全集', '新下谷叢話', '妙法蓮華經', '佛陀の生涯', '大・中・小', '周作人隨筆抄', '約世界文化史', '日本人(附・戦争と國民性)', '世界大戦一その戦術', '列強現勢史', '日本經濟史', '成吉思汗(アジアの風)', 'ルネサンス三巨匠傳', 'ギョオテ傳', '縁の月桂樹(西洋の料)', '歴史の構遣', '十九世紀ドイツ哲學', 'ハイデッガーの哲學', 'シャルル・ブランシヤアル', 'トリスタンとイゾー物語', '繪失樂園物語', '三つの物語', '良寛歌集'.

アンリ・ブリュー ラールの生涯 現代の物語 (第一巻・遊歩場の旅) ヘッマール日記抄 グーテ 友交書簡集 悪魔の靈藥(上・下) 成年の秘密 美しき青春(附・詩集) 生の彼方に 騎士道時代 巡禮者の旅(天路) 十八英國滑稽作家傳 川 彌 々 ル カ 白 鯨 ホキットマン野外日記 ツワイス トールド テールズ(第一部) 序曲・入江のほとり	スタンゲル 阿部 二 小林龍雄 吹田 助 菊地 一 ホフマン カロッツ 高橋 孝 ヘッ 富士川 シニイ シニイ 中島 孤島 パニヤ 佐々木直次郎 サツカ 平田 元木 ウイリアム 野村 文彦 H.メル 高村 元太郎 ホーソ 長瀬 一郎 千賀 耶生 マンズ 佐々木直次郎	ハックスレー航海記 園 藝 学 日本 鳥 史 日本 醫學 史 孝 道 國 語 の ため 文 學 に 笑 の 研究 シラ 素朴と感傷の文學 文 論 比 較 文 學 アンドレ・ジード 人 と 作 品 日 本 の 人 形 (附・人形師) 樂 場 訓 蒙 四 卷 辭 典 版 希臘 神話傳説辭典 生 物 學 辭 典	藤 松 豊 伊 東 秀 夫 中 西 悟 堂 富 士 川 壽 澤 柳 政 太 郎 上 田 萬 年 新 村 出 校 訂 成 瀨 無 極 高 橋 義 孝 グアン・ティ 太 田 咲 太 郎 ビエル・カ 小 田 善 一 山 田 徳 兵 衛 田 邊 尚 輔 式 亭 三 馬	藥 用 植 物 辭 典 茶 道 辭 典 神 祇 辭 典 佛 典 解 題 (支那・日本) 佛 典 解 題 (印度) 能 樂 詠 曲 辭 典 日 本 演 劇 辭 典 人 形 淨 瑠 璃 辭 典 名 作 江 戶 文 學 辭 典 解 題 明 治 大 正 文 學 辭 典 支 那 小 說 解 題 名 曲 西 洋 音 樂 辭 典 西 洋 音 樂 史 辭 典 (附・西洋音樂) 名 曲 歌 劇 辭 典 支 那 地 名 辭 典 琉 球 地 名 辭 典 外 來 語 辭 典	日 根 野 正 隆 高 橋 龍 雄 加 藤 玄 智 露 口 駒 浪 金 山 正 好 小 野 文 妙 辻 森 要 共 山 崎 榮 堂 松 本 龜 松 酒 美 清 太 郎 藤 田 善 雄 味 岐 康 隆 柳 田 泉 長 澤 規 矩 也 山 根 銀 二 太 田 大 郎 二 見 孝 平 星 城 夫 東 尾 納 寛 博 兒 川 豊 兵 衛
---	--	--	---	--	--

921.4

M045

4

終